荻屋集

836
3
24

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24

ガラス使用

荻舎集

文部上

九

836
8
24

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』 請求記号 836-24

ガラス使用

国立国会図書館
昭和正
9. 6. 17
購求

文集

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24

ガラス使用

荻舎文集上巻

郡上名勝圖序
卯月壽言序
久佐麻矩羅序
古今名稱考序
僞書叢序
萬葉類纂序
氏族類纂序

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24
ガラス使用

皇室稱號録序
皇統略譜序
古今學館考序
御寓年數考序
天朝古實考序
阿津佐由美序
釋語類纂序
萬葉集作者部類序
二史歌目録序
東路口唱序
家集序
楢二葉序
皇統正閏考序
家迺風序
齊明紀童謡後釋序
萬葉集追考序

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』 請求記号 836-24
ガラス使用

附言

是篇ハ普通の如(ゴトク)全假名ふて書(モノ)きべき此(カクザマ)様ふ記(シル)さむハつきなしゝも云(ヒ)ぱ仮名(カナ)ふて書(モノ)きべき此(カクザマ)様ふ記(シル)さむ義の通(キコ)え易(ヤス)きゝも有(カ、ル)ゞなう簡約(ツヾマヤカ)ふて意(コヽ)ぢ氣吹舎(イブキノヤ)文集の體(スガタ)ふ倣(ナラ)ひて姑(ヒトヅ)く〳〵ゝ書(カケ)ゝ有(カ、ル)ゞ此(コヽ)ふハ益(ヤク)なきこと本書ふハ戯(タハム)ふ萬葉風(ブリ)ふ書(カケ)ゝ有(カ、ル)ゞ此(コヽ)ふハ益(ヤク)なきこと況(マシ)て往々(ヲリ〳〵)考説と混(マジ)へなさ(ヌ)ばなり唯尋常(タヾヨノツネ)の體(スガタ)ふ記(カキ)イデ後(ノチ)ふ書出(カキイデ)ゞハ追(オヒ)ぎ〳〵加(クハ)へむゝそなゝ

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24

ガラス使用

郡上名勝圖序

古昔の風を見或ハ山河の體邦人の貌をゞを痍小辨へ知べきハ畫ゟ若くものなし有らぬ黙ハあまゞ其楨々の圖をし規矩ゟ合へて花ハ麗く雪ハ寒けきやうに其眞を寫し得るおと甚難くな曇く有りける然るゟ我父の命一
手刺竹の君の公の暇賜はりて百詩年の美濃國ゟ八幡の城ゟ帰て給ふゟ傳き奉りて樹々の梢の色着頃よ

速水行道著

て明年の弱葉茂る頃まで居給しけるを間暇有る毎
に彼處ゟ名たゝる地々ハ更ゟも云ハず此處彼處觀歩
きておの〳〵好思ひまゝ〳〵親鳥し採ゟ家裏ゟ持らし給へるを即
展き觀るゟ秋の花野の色々なるを甚委曲ゟなも書き
連ね給しけるそも〳〵此帖よ珍らゝるる圖の此彼多ゝ
る中ゟ足曳の山路を望やきバ角磐經巖ぐねの怪しく
嶮しきゟ驚るゟ石激瀑布を見きバ山彦ゟ響むを覺え或
ハ千早振神の瑞籬の尊き石上舊き寺々の世離たる
或ハ尾崎ゟ名高き眞清水の潔きハ更ゟり其
碑の

古昔を偲ぶつまなる
なゝ奇しきハ北野の神影の現も大る石ゟあやからや
うゟ種々の圖をし寫し給へるゟおよるゟ何怜なきバ
猶繰返し見ゝて行くゟ殊ゟ怪しくゟる怪しく奇し
きる如思ひ迷ひ勝更の雪ゟハ坐ゟ標ゟるゟ然
るぶら其地ゟ到ゝて面前見ゆる意せらる阿波礼此帖ゟ
しも依ぞてハ彼山河の狀き國人の體をゟを何でゝ
ハ知ん有も是ハ父の命のうゐる佳境をし彼處
ゟ得往ぬ者の知らでゝ在るぶらち惜ゝてうく物し給ひ

しまて献(ハメ)夏ふ敬の忠實なる御心よ
り愛(メデ)たき書帖ふしも有るをバ今(コタビ)度菅の根(ネ)の懇懃(ネモゴロ)を整(トノ)へて王緒(タヅラ)の永く家(イヘ)を貽(ノコ)さまくを是(ヨリ)を依(ヨリ)て序(イサカハシデキ)を因(チナミ)
り彼城(キ)の下(モト)に住(スメ)る藤原安禮(スケノリ)が此圖を見(メデ)て作(ツク)る詩
をも附(ツケ)ぬ(ヌ)れて畫(エ)の傍(カタラ)なる歌ハ己(オノ)が思せ事(ワザ)ふる草(ソウ)有(リ)け
る時ハ弘化二年(トセ)ゝ云(イフ)年(トシ)の七月(フミヅキ)初つかた風うち戰(ソヨ)く荻(ヲギ)
の屋(ヤ)ふて真名子(マナゴ)行道(ユキヅネ)識(シル)せる

卯月壽言序

千早振(チハヤブル)神代(カミヨ)ハ更(サラ)ゝ云(イハ)ぬ(ヌ)ゝ呉竹(クレタケ)の齢(ヨハヒ)長(ナガ)き人々の後(ノチ)の世
ゝ聞ゆる勘(カムガ)へらるゝ黙(シカ)ゝ有(リ)まゝ百世(モヽヨ)草百年(モヽトセ)ゝ近づきぬ
る今(イマ)容易(タヤス)へらるゝ黙(シカ)ゝ有(リ)けるゝ我祖母君(オモキミ)ハも特(コト)ゝ
磐長姫(イハナヒメ)の恩頼(メグミ)をや蒙(カウム)り給(タマ)ふらも太(コソ)ゝ九十(ソヂ)の春を
迎(ムカ)へ給(タマ)ひぬる猶(イトヽ)壯健(スコヤカ)ゝて稚(ワカ)き孫(タケ)の若きを得及(エオヨ)がめ節(フシ)
のミ多(オホ)く其御狀貌(ミアリサマ)なゝ幾許(イクバク)年(トセ)をゝ經給(ヘタマ)ふらむゝ見參(ミマヰ)
らまるゝ就(ツヰ)ゝ常(ツネ)ゝ昔人(ムカシビト)ハ異(コト)なりなゝ云(イフ)めるゝ人言(ヒトゴト)を實(ゲ)
ゝ然(サ)ゝ黙(シカ)ゝ有(リ)る(ル)ゝ父母(チヽハヽ)ハ云(フ)ゝ更(サラ)ゝ也(ナリ)行道(ユキヅネ)等(ラ)が幸(サキハ)浅(アサ)うらぬを
ぞ倭文(シヅ)の苧環(ヲダマキ)繰返(クリカヘ)しつゝ歡(ヨロコ)びぬる斯(カヽ)有(リ)しらがいさ

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』 請求記号 836-24
ガラス使用

年の賀ともゝ〳〵同じ年の卯月九ぬかの日 祓属ま〳〵
生平小親〳〵友ゐ〳〵此彼會へてそ祝の酒飲せ給ひけ
る是ハしも故ゝ日を撰びてゝ小ハ非ばとつまど自然九
日なゝ〳〵奇異ゝこゝけてゝ此日集へゐ人々ハ素よ
ゝ〳〵黙らぬ語て継ぎ言し次ひ阿那希見の人や
阿那珍たき齢やゝ〳〵歌詠て賜へゐと多育〳〵我離の羽
根掻書列ねて人ゝを示し後ゝを傳へむゝ〳〵如是記し
終て筆をゝ〳〵置ハ弘化四年ゝ〳〵云年の六月四かの日荻
園の主人行道

久佐麻矩羅序

皇大御國ハ掛まくゝ可畏き天照大御神の生坐し本つ
御國ゝ〳〵て天地の間小千萬の國ハ有ゐ〳〵特愛痛く富
足〳〵て何事ゝ足ぬ所ゐく山河の狀〳〵勝ま〳〵る営有
ける斯〳〵原ハたゞ八洲ゝ〳〵て有けるを後漸々分ら
ゝものゝ〳〵て其間小又併せゝゝと割きゝし〳〵嵯峨天皇の御
宇小おゝ〳〵終小今の如六十餘小ハ定ゝぬきけて〳〵く數
多ゐる國の中ゝハ平坦ゐる有〳〵て嶮岨き有〳〵て海面小斗

出たる有り山中ゟ引入たる有り木ゟ宜き地有り麻ゟ宜き地有り駒の蕃息ゟ地有り温泉の涌出ゟ地有り様々なる故古昔ハ國々の圖あるゟ風土記ありて何處も委曲ゟ知つるゟめり中葉の乱ゟ然ゟ書ゟも散ぶり亡て今ハ其風土記の中絶ゟ出雲常陸ゟ三四國ゟ古書ゟも ゟ援引たる文の少世ゟ存まるのミ。然まバ處の狀ゟ舊ハ何ゟ有つるゟ知ㇾ難きゟ多く要ゟ有ゟ神の御社ゟ趾だゟ詳ゟらばゟ有ルを況て好僧の誣説ゟへ加へて弥紛らはしくするゟ為てける然ゟ小百余餘以往ゟ古學の道開ㇾ見つゝなる考説ゟ次々出て此有事も漸々ゟ明らゟ行希ゟ考の助ゟ為ゟ物なるを貫之ぬしの筆ゟ始ゟして更科十六夜の類ハ更ゟ後世人のゟ此彼有るまバ門ゟ出ず他國々の狀知らまぬる。ゟ勘つらぎゟ然ハ有まゟ唯書籍の上のミゟてハ何ゟ善く書寫したらむも猶得難き所有るものゟて必親往せばまバ慊ぬとばるゟを然

そ㆘て其悉くハ何でう能く巡り得べきたゞ已々ぐ專
ㇾ志ㇾ處々だ㆘探ね訪ま欲きまゝ㆘ろそハ有ㇾけま㆒然
ㇾ㆘ろを幸福有ㇾ往ㇾ伊勢の大宮ふハ詣でぬ猶京邊ふと
思ひ懸つきぐ暇るくて久〳〵過ㇾ来つるを今年君の御
從仕へ奉ㇾて美濃國なる郡上ふ往ぬ最好き便なまが
轸の暇賜はりて既く思ひ設し處々を打廻ㇾ㆘ろな㆒本
意ふハ協へ㆘ろ是ハ其日々の事ぐも忘ㇾじ㆘道ぐら
假初ふ書ㇾて行るゞ思ハぎも數積でて書籍めく物㆘
為ㇾまゝなり默ㇾ㆘ぐ處々の狀素ㇾて扯き筆ふハ寫し得難く
記ㇾべき事の漏たるも多く
況て彼處ふ勝らぎ㆘云ㇾ歌の
子孫ふ貽ㇾま欲く又已ゞ後ふ思ひ出ぬべき鶴すㇾも
為ㇾ㆘ぐこゝ㆘破ㇾ棄ぢ默ㇾるゞらに存し置く㆘て率児等
巻の〳〵見よ草枕旅の硯の縦溝浅く㆘も詠加て即書
の名㆘為つ時ハ嘉永五年㆘云ㇾ年の九月下つ㆒ハ此云
ハ荻屋ふ住ㇾ愚人速水行道

古今名稱考序

久方の天地の間ゝ生ゞし生活ゐる物何ゞこゝ其名
無らむ是ハ名無くてハ物を辨ふるよすがなく能ハぼ已
づらに黙なゝ其名ゞを附て何ゞも熟く葦鶴の探
称知るべき中ゝ殊ゝ辨ふべきハ人のなゝ是ハ千早振
神代ゝ始ゝて顯身の人の世ゝ及ぼる我世の移ゞるま
ゝゝ変ゝ行て草香山種々ゝある名ゝ其ハ謂
ゆる實名字別號通稱諡なゞの類ゝ物なゝ斯て其名ゞ
ゞ梓弓本つ義ハ共ゝ替稱し
上ゞる代のハ辜ゝ觸ゞ物ゝ因て荒波山繕ゝ飾ゞるこゝ
なく唯有のまゝゝ眉けゞバ今よて見てハ延ふ絡石の
拙く映ゐるきゞゝ如くゐゞ其却てゞ上古の質直ゐる
ゞゝて甚愛たきを後瀬山後ゝやゝ字を撰び俗よ
熟字ゝ云ゐゝものを漢籍の中よゝて採出ゝ事ゞゝくゝ員
ゐるこゝゝ為ゞゝて是ハ字の上よゝて見ゞバ春花の美たく
備はゞゐるゞゝ如くゐゞゞ名ゝと實ゝゝ違ゝゝゐる虚言のミ
多くて三栗のなゝゝゝ小拙し黙ゐるハ言喧ゞ漢人の理
深げゝ記し置る物の中よゝて野遍の小松已ゞゝゝ引
出ゝて命ゐゝゝゝ大抵其人柄ゝ何ゝも依ゞゐるゝゝ

非ぢまバなど默ま〻是ハ漢籍渡ゐて此筋の學世
ゐ盛ゐ流行ま　何事も彼國ゐ倣ふおゝ〳〵為ゐよもの
風習ゐて是もまゝ自然の勢ひしゐし有まバ今古風の名
負て却ゐて異様ゐ聞えなもよもハゞ呉竹の世の常
ゐ從いたらむぞ宜しうるべき默ハ有まじ其本義まゝ
古昔の風次々ゐ沿革まゐ趣を
ハ得有らぬわざなまバ今其概略を書記して例の初學
の徒の山口の栞ゐ為ゐハ嘉永六年ゐ云年の秋立て幾
日も有らぬ七月の初つかた秋涼し〻風戰ぐ荻の屋ゐ

偽書叢序

掻巻も畏き皇大御國ハ千速振神代よゐ高光日御子の
樛の木の弥継々ゐ所知行つ
ゐ治ゐらる我三栗の中葉よゐ禍津日神の荒び止時
なく苅薦の乱ゐ乱まて甚も侘しき世の狀なもし我直
毘神の御魂ゐ依て默しも荒びてゝ神の心や安
定けむ玉匣再舊の如治て世間靜けくるも為ゐける

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24
ガラス使用

然きバ玉緒の絶たるし學の道漸々ゝ開けて
書籍ぞ次々世ゝ出ぬるい冝しき事なる
何なる奸人の呼為なるら学中つ世の乱ゝ散亡
て名のミ存ま書等を似着しく種々方便て偽を造て或ハ別ゝ作
設て古昔の人ゝ依託など。空蟬の世人を欺く類ゆら
ぞ學の鵜ある徒ハ奈麻余美の甲斐なく欺まてむげの
嗚呼書を 愛尊び
其妄説を信あるハ悪
ゞも悪き事ならばや然ハ有まぢ偽書ゝハいうなら
ぞ偽の破綻ゝおろ有る物ゝて絡石葛柮きハもゞよて
掩ひ難く飛弾人の巧なるも稍見元難きのミ然そぶに
物識者ハ欺き得ぢる物ゝし有まバ能く其鑒定を經て
おそ古書ぞもにえ據べきわけを於是比年世の識者等
の着せる書等の中ゝ何くまゞ論ひ定めし説の多有を
犬馬鏡見得るまゝ若草の爪験せてしぶ何しうも
百種ゝ餘まる我此方彼方摘採て書集つる小冊分
つゞく為ぬまバ是許の物を千代の古道蹈見む事足
曳の山口ゝ徘徊らふ初學の導ゝハ為る事のゆ淳

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24
ガラス使用

書はせて人ゐを見せばく為しとある事阿波礼實學ふ志は
む徒ハ荒磯の波の踈々しく過るおゝ無く村肝の心を
入て古昔の事實を明先む必勤ゝ習ふべき事ふなを有
ける

萬葉類纂序

皇大御國ハ言靈の幸ハふ國ふして其
言の正く雅びたるおゝ千萬國ふ比類なく甚を尊く甚
も美たくなる有けゐ故千早振神代よゐ歌ちふ物有て
故々詞を文るゝ事思を延へ心を遣ゐ便々為ゐを
自然の物ゐし有まバ内日刺都の人ハ更ふもゐぞ天踈
鄙の人まで甚善く詠へゐる中ふ柿本朝臣山邊宿祢るに
ゞ勝ゐる人々此彼出て春花の愛たく詠出けまバ弥是
道開けゞ開けて其言葉夏草の甚茂く為乙ぬゐを石上
古きハ古事記日本紀ふ見元て花勝見らづゝハ傳ハま
まぐ其ハ事ふ繩て記ゐまゝし物ゐて素よゐて歌書ゐら祐
バ事の廣うらぬ事を是を尊ふ集へゝしハ此集ゐも始
なゐしける抑ゝ上ゐる代のハ美けまゞ美

初學の徒の容易くは學び得難き姿なる我此集を載たるは彼二書よりも後のおて歌數も甚多く其姿なども學び難からむ然も古き世のおもむき有をば村肝の心朴直なる雄々しく詞雅びて調柯怜く是よりも後撰木の弥嗣々く撰しき書るをば古學を為むかい先能く此集を讀味へて上代の意言を知て然てその御史の清き流を泝洄て遂に神代の水上を認て神隨なる皇御國の遠白く妙なる道を窺ひ知るばかおもむきも有けむを彼沖つ鳥賀茂翁の生涯精力を此集小竭し盡して此有謂を依りおもむきを渡津海の深き思慮有ばなむ然る我山井の心淺き人々は歌は唯はうるき遊びなるをもてそして汲べき物とも思へらず王菖大あまく喜める者も然る事かい懸をも思い寄らず後瀬山後々の集等を上も無き物なし下き世の風を學びて無用小詠歌を風雅の至極小思へるは甚味氣なき見解なるのみし然て是集小載る歌ぶも菅根の長き短き多かる中小冠辞序辞對語畳語長句短句延言約言をぶ有りて綾席種々小文るせ

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』 請求記号 836-24
ガラス使用

ゐそも自然ゝ定格あまた此集を讀解むかを又此風を
詠習ハ学ふ先その規格を考へ知るほきとばなる材
真木柱巻數多くゐる　集中を雪間の若菜ひりつ〳〵尋称
学おも煩労しけまゞ其種々の格等を志賀の海士周
く磯囘出跡見の岡邉疾ゝ見渡もばく書集てうの水上
を認往む其ゝ道者ゝ為ゐ者ハ荻屋の窓の下ゝ古偲ぶ

氏族類纂序

千速振姓氏の出自を明むるハ古學の要ゝ育ゐおゝ
ぶら其甚容易くらゞ然ハ有まゞ嵯峨天皇の大御世ゝ
成つゐ姓氏録の玉緒の乱世ゝ散亡ぞ千年ゝ餘まゐ
今の世まで真榮の葛真幸くて傳ハ来ぬまゞ是御書
をゐゝ釧甘らに讀解て其あゐ壯を考知べきおゝゝ
ハ有けまゞ然ゐを世の初々しき徒ゐにゞの仏ゐ由縁を
も辨へゞ大抵おゝのしからぬ物ゐをゝして菅根の丁寧
ゝ讀味へ学ゝゝ思たらゞ疎略くのこ觀過そめるゞ甚
歎かし〳〵何ゞ好き註本ゐゞのゝ荒璞の年頃思ひ渡まゐ

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』 請求記号 836-24
ガラス使用

を霞ふて遠江國人内山真龍が勤める物なる玉掃たま
たま世ゐい遺ものけるを歓びくて即採て閲るゐ主ゐ
國史を援出て愛たくい註せまゐ何ゐせむ片糸の未成
なる書ゐ覚えて漏るる事多なまゐ浅茅原なほ委曲よ
考記くて是ゐ栞せばやゐ既く思い為て負氣るくも其ノ
傳を撰び録をゐ就てまづ録中ゐ同祖なる氏々の此處
彼處ゐ出たるを各々一ツゝ會へ其族を分ち唯一目ゐ見
渡をぼく苑の黄葉書集て考の便ゐ為るゐ文机の邊ゐ
散ぶいるまゝ我疾く見咎めて本傳の成をむい間入ツ
とばるまゞ先是書を世ゐ出くして彼疎略なる徒の山路
の栞ゝ為なまゐ人皆の言つるをゐ是ハ苅薦の假初ゝ記
ちゐふて甚く澁のはゝく定あへぬ處を有まゞゐて聞
も入まゞとうぶ慇懃ゐ乞なゐ残いな席辞ゐ難て終
小諾ふおやいい為てぬ然まゞ梓弓舊の侭ゐてい人の
不審べきふしもや多有なもゐ伊佐々村行市まゞの概
例を書加て斯ハ物しつるゐなる有ける

皇室稱號録序

明つ御神々大八洲國知し食来る
天皇ぐ大御系統ハ
も掛巻も畏き皇大御神の大御任しのまゝ〳〵高光日御
子の天の八重棚雲を排分け稜威の道別々々給いて蕩
まくら高千穂の峯ゟ天降坐しよゟ久堅の天地のむ〳〵
永世ゟ絶るおゝ無く春花の美く盛え坐つ〳〵皇統ハた
春草の弥茂ゑ坐まして呉竹の世々を經るゟ從い其
御稱號々も種々いて来て曇夜の甚紛はしくな
もるゑふける然きバ初學の徒るぐハ千代の古道書見
る毎ゟ朝霧の思ひ惑ふおゝなるを何で是ぐ鶴すゟ
ゟ日影隠ふ西山の君の撰び給ひし御史を讀通る因ゟ
驗の杖いはゝの記し置るを園の落葉書集てゝくハ
物しつるなゑけゑ然るハ彼大づ〳〵數徒の為便宜ゝら
むゝハ為まぐ猶非事のゑ多有むゝ所思ゑものゝら是御
史ハ右ゑ世間ゟ傳ハる書籍ぐゑ至らぬ隈なく求食
磯の白玉周く拾ひ採て録し調へ給ぐる物ゟし育
ゑバ誤漏大る事ハ無ら安〳〵ゝ大船の思ひ憑まをてなむ
時ハ安政四年ゝ云年閏五月廿九日雨降て甚寂然る
荻園ゟ

皇統略譜序

掛まくも綾小畏き皇大御國ハ天照大御神の御言依さ
のまゝ〳〵皇御孫命の所知看て〳〵天津日嗣天地と共に絶
る事なく窮る事なく久遠に繁榮給ふおと實に類な
く珍〳〵も珍く尊しかも尊き可美御國ぞし有まバ
世に生まく生まし出るほゞの者ハ記紀を始世々の記録
等を讀通て〳〵其皇統の正しく貴く坐まし事ハ更なて
皇國の萬國に勝まる由緒をと御世々々の有狀を
窺い知るばき事なまこゞ其容易らねだ
徒或ハ鄣架ふ忌しく或ハ産業に暇なき者等の然ハ得
物しあへぬ類ハ其御世繼の狀の概略をだに辨へ居ぢ
きおゝふなく有ける然る皇統を録せる書世に此彼
有なまゞ或ハ展覽に便宜のらぎ或ハ譯まる事なも有
て一向ふハ信み難く要ゝ有る御世次なら神功皇后を
算へ奉て〳〵飯豊大友二天皇を入まき奉らぎ或ハ北朝を
正統ゝ為〳〵却て南朝を僭偽の如くし或ハ全除き等し
て濫なる事勘のら灵然る我世の人俗書に見馴て事實
初學の

をも考へ究めず其謬説に惑へ
おのならぬや柳皇統の御上をば猥に録ゆむは可畏け
きぞ熟人の惑へるが慨かしけをバ嚮に大日本史等の
正史に據て其略圖説を著しつきぞ省き過て事ゆゝ
しきバ今度いゝの増補へて更に見易く記たいなて
是ハ彼初學の徒等の渉獵を煩ハゆでゝの易く意得らき
ぬばく又古學ぶ徒の毎に机上ゟ披き置て書籍ぞもぞ
供見べき料に簡ゝるるを主ゝ為きバ遺漏せる事多く
て甚足ぬ意 そきぞ其詳悉るる事ハ他書ぞもに備
きゝバ若猶安く知まく欲せバ即是譜を栞くして就て
閲むも難からじかてる故

古今學館考序

言喧ぐ漢學の皇御國に行ハるゝハ輕嶋明宮御宇天
皇の御世百濟國主照古王ぶの調貢使に阿直ゟ云るが参
きるを猶賢哲人有らバ貢上るまき趣の詔勅を奉ハて
て更に王仁を参らせるに属て論語ゟ千字文を貢ぢし
て皇子菟道稚郎子此二人の博士に就て學び給ひふ

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24
ガラス使用

始めて漸々世に傳播けり猶飽給はぎや有りなむ其後
小治田宮御宇天皇の御世よりふたはへて漢土へ大御
使を遣はし學生をも遣はして物習はしめ給ひ彼土の使
人も參來なむどして弥盛に為もて行遂に京都に大
學寮を置き國々に　學校を建て懇懃に訓へ導かしゝ
かバ抜群ある人々數多出て頻に珍重せるまゝ或ハ
特學館を管掌て氏人を教養し或ハ更に書院を構へて
典籍等を藏蓄へなど斯道に勤む　人な世多のアヒ
黙まこバ　是を史籍に載て其功績を傳へ　し故撰史の
御舉絶しより後ハ萬の事湮晦ゆきて聞えぎ為まるが
多かる世間ゟへ終に乱まて闘戰の場と為て兵燹に
罹てなむどして何處も甚しく荒廃しのバ彼設も趾を失
ひ書等も散逸て黙しても隆盛なるとし學業も次第に衰微
て　殆亡果ぬばかりのとし我二荒山に鎮座坐る東照大神
の最も畏き御稜威に依て世の中再靜謐まるを此大神
ハも武く雄々しく御座しのこならぎ學道にも勞ら
して周く遺書を求出　或ハ寫し或ハ板本もして世
人を誘い給いしのバ埋もるゝとし書籍にても次々世に顯

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』 請求記号 836-24
ガラス使用

も　漢學ハ更ニも云ハず我古學の道へ開けて漸々
古昔ニ復らひぬるなむ甚と盛大き御事なる　然るニ
こゝの如き愚劣者と其御恩頼を蒙りて書籍の一端を
窺見つゝ古昔を偲ぶ餘りと何くも收り書著せる因ニ彼
館の事等のこゝつゝ心ニ留まる故今度ニ許書記して例
の初學ニ示ける序ニまで然るニ余家書ニ乏しく廣くハ考
索しあへぞ　唯生平ニ手馴れある彼書等の一端よ
り僅ニ拾ひ出せるなるが考證の備らばるハ更ニ非
ず説ゝ多有べき筈其ハ追つぎて補ふべく閲む人ハ
正しく祢ゝ抑此漢學ハ皇朝の古道學ニ於て廢難き物な
るを並々の皇國學者然る謂をも解へず玉勝間等の説
を麁く意得　漢籍漢學ぞゝだニ云へバ一向ニ忌嫌ふ免
るハ甚固陋き　見識るなゝし然るハ翁も全漢意ニ執
のるを以て思ふまゝつゝ漢國の書を不見るぞ能き漢籍を見ばこそ其外國の風俗の惡き事
知らまぜ又古書ハ皆漢文なるゝ書たるをバ彼國風の文も
知らぢハ學問も事ゆき難けきバあて云々るぶも説ニ
しならぢや　按ニ是學びハ彼土の惡弊を知て又我古書

を讀ぎき便く為るのミわハ非ぎ既わも云る如く古昔ハ彼國へ大御使節を遣けき又彼元々號る代ゟ負氣なくも皇國ゟ射向い奉まる等を始彼土ゟ係まる事件と多のまバ一通 其沿革を知らでハ得有らめとば る小況ゟ皇朝の御制度ハ彼土風ゟ倣いましゝ多くの る故や黙まバ熟く本末の差別を辨へ謂ゆる蕈内卑外の意を失ハぎ皇國魂を固め置てハ漢籍をと渉獵ゟ古學の裨ゝくな ゟ為ぬのミけ る是ハ初學の為因ゟいぱい の数ゟ置ゟおく

御寓年數考序

此書ハ嚮ゟ皇統略譜を著る時此彼の書を閲つる小正しく委しく信める書の甚思の外ゟ誤あてて定ゟならぬる事多ゟ中ゟ御代々々の御在位の年を計るやう殊ゟ紛らはゝ諸書の説異同有る故何るゟ收ゟなゝ考せる如く多四種の算ゟ通考せる小是ハ本篇ゟ示せる如く多四種の算ゟ互ゟ算へ誤まるの有るを以て黙る異同ハ有るなをけて其考を物の端ゟ假初

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24
ガラス使用

小書し置るの草稿ぞもの中ゐ有りしをふゐ見出つまバ
後の考の助ゐもゐ如是清書せるなど抑天皇御治年の
事なぞゐハ深き故有もも知ばこのらばまぶ今ハ前後の
例を推考へて姑くゝハ論ひ試こるなど謬誤有りと
ゐハ後人訂し補ひ給へゐぞ

天朝古寶考序

言はくも可畏なまぶ此豊葦原の水穂國ハ深く妙なる
幽契あて神等の故ゐ修固め給し皇御孫命の無窮ゐ
所知食る奠しゐも尊く宜しゐも宜し知可美御國の祖
國ゐしあまバ有ゐ有て成ゐ成ぬる千萬の事も物も他
國土ゐハおよなく超絶多るハ固もその事なるを其超
絶たる品物の中ゐも上代のハ殊ゐ勝もて嚴めしくも
麗しくも精ゐ珍たくなも有けるを猶る止事無き御國
ゐも吉事のこハ得有ぎしても凶事も交らひ往く世の理
の便もなく其嚴めしくも美しくも精ゐ珍たる品物当
乃七失そばき期の臻まるゐや有けむ多く歳月の来經
ぬる麻々ゐゝ或ハ火の災ゐ罹或ハ倫兒ゐ奪盗らま
て行方を失ひ或ハ世の乱ゐ散亡なゐばして上代のハ

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24
ガラス使用

更ゐも言は更漸下も中世の物等仏へ後代ゐ傳ハ
ゐハ甚有難く為ぬるなゐも惜しくも惜しく悲しくも
悲し妃事なをけるはて此有ゐ中ゐも古書等の多く亡
て諸の傳説の知らまぞ為ゐゐ多かるハ殊ゑ悲しき事
あをうし然ゐハ記紀の両大御典を始今の現ゑ傳ヲ来
ぬる古へ書等の小准へても皇神の御代よをして後の御々
代々小臻ゐまで尊くも愛たくも奇しくも希見くも武
くも優しくも正しくも勤しくも可笑くも恐しくも哀
しくも喜しくも種々の事件の猶幾許も有ゐむゑ私ゐ
想し像らゑとバなゐ然をして其いふゐ嘆息くゐも
今ハ何の詮ゐハ有む益無き事ゑハ思惟をのゐら舌偲
ぶ真意の愚意の黙し難く其亡太し由緒をだゐ少ゐ
をゑも書集て後世ゐ傳へま欲くをく已ゐ膝下ゐ物
學ぶ徒の楷梯ゑも為ましゑ見出るまい記し付るゐな
ゐ然ゐぞ是ハ他ゐ種々勤労く事有ゐ傍の業ゐし有ハ
事の廣ゐらで掛漏たるゐ多ゐゐるをく重く大きゐ
ゐを遺して輕くルきを録せ類の謬誤も有ぬばゐぞ
微力の及バゐるを何ゑゐの為む其ハ後ゐ見得ゐらむ時

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24
ガラス使用

猶
時幾條も書續てむや例の禿たる筆を執るハ安政六年
やう云年の七月の上旬此く言ハ君ふ事ふる暇の開ふハ
凡案のもやう我離ゐ難ゐ書讀む事を樂ゐ為る速水行

道

阿津佐由美序

初學の徒の歌を學ばむもハ先三年一字の如初ふ詠習
ひ其熟く口なまゝら覺上ふ長き調のを習ひけて此
頭を旋らそのゝ一の體なをバそふはら習ふべきわざ
なり有る然ハあをど短き調のやもハ類題やうの
本やう為べき書ら甚多く長きのゝ稀々ふハ見えおらぐの
へるを此頭を旋らそのハ未見えど怜野集なぐるハ枚
入なをど短れ中ふ混てゝ求むるふ
容易くのらねど

集へて。

其學ばむやう為なる徒の楷様やハ為る
ゐて是ハ多くのらねバ足ぬこゝち為めをど此體の古く
傳ハまるゐ此のこゝなる我何やうの世學然をど初學の本
ゝ為むやハ是ゐて足ぬゐゝ多くら世むゝ世名ど後々
のをゝ採入むハなのゝまるわざゐらぢやハけて是體

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』 請求記号 836-24
ガラス使用

の事ハ縣居翁の説く旋頭歌字音もせずうかゝよむもとはづめ我ぐらゝ歌ゝ云義なり何ふゝなるがまづ五言七言ゝ言し起るハ歌の始あるを次々五七々々もいと續くゝまバいつまでも連ふるを七々ゝ置く時言し終もて是ハ五七々ゝ言し終もて又五七々ゝ言し終もて又五七七々ゝ言し起る故小頭ゝ旋らゝ歌ゝ云ふなりけり再度たゞ先ハ旋らせもて又七々ゝ言し終もて是を濱成ゞ和歌式ゝ雙本歌ゝ云も五七ハ歌のはづめ始ハ本ともゝ云へバ五七々ゝ書し又五七七々ゝ言し本を雙べゝ言へまバ聞えおを歌の本ゝハ上の句を云ふまを末ハ下の句を云ふまを思ふべしゝ有るゝて意得べし清輔朝臣の奥儀抄ゝ是を昔ゝ還る義なるゝ云ゝしハ契沖も辨へゝなる如く非説なるを此くゝて是體の發起するやうハ翁の説ゝ古事記ゝ片歌ゝ云ゝゞ有て五七々ゝ言し終もるのみなを是ハ歌の始ハゝのゝみ言しゝを其後是を二つ重ねゝ言しゝゞ一體ゝ為もゝし故ゝ五七々なるハ此旋頭歌の体歌ゝ有る意ゝて片歌ゝ後ゝ云しもの名ゝなるべし其ハ片歌ハ古事記日本紀ゝ載らをなる如

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24
ガラス使用

く甚古きが此旋頭歌ゟ云ハヾ後もて萬葉集ゟ至て
て始て見元るに其體片歌を二つ合せし仝同じけ
まバなを但し是ハ誦ゟ旋頭ゟ載るのミもて者を
是調なる㕝集よゟ始まる仝ハ非ず其ハ古事記中巻仝
見元たる應神天皇の御製及下巻なる八田若郎女の仁
徳天皇仝答へ坐る御歌又日本紀雄略天皇紀ある巧者
ぶ歌及繼體天皇紀なる毛野臣の郷家等の歌なぶ片歌の
問答仝ハ非ぱる一首の歌なるを找仝其體あるを知る
べし偖其原此の如くなまバ五七々五七々の調仝乖へ
るハ後の變調なる事歩を論じを待くばるものぞ但し
是事記紀を見知む者ハ此くだく諭むハ速仝了解べ
なまぶだく〳〵志ゟ際ハ猶打傾くも有ぬべなまバ今彼
二書仝見元たる片歌を載て其源を示ゟ私ゟ阿波礼熟
く此原を知て後の轉訛仝惑ふべうらぞ混本や混本
ゟ云るも是體の一名なゟ是ハ王勝間ゟ古今集真名序
仝混本ゟ云歌の體を擧らまなるハ思ふゟ是ハ本仝混
ぶゟ云なまバ旋頭歌の亦の名なるべし別ゟ此體有る
ゟハ非ず然る我古今の序ゟハ別ゟ一體ゟ意得て云へる

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24
ガラス使用

歟又ハ長歌短歌ヲ云ヒ四字ノ對ヲセシメンガタメニ旋頭ヲ旋頭混本ヲ書ルヽノ何ノヽマヽ別ノヽ此體ハ有ルベシクモナキ後ノ書等ニ其歌ヲテ一ツ二ツ有ヲバ彼古今集ノ序ニ依テ故ノヽ造テ設ケヽル物ヲテ云ヒ足ラヌ歌ナドヲ其餘ニ古ヘヲモ混本體ヲ云ヒ歌ハ有ル事ナドヲ書ルニテモ著ヲヤ凡其ハ混本旋頭雙本悉同義ノ字ナルヲテ彼四式ナドヽ云類ノ書ルハ非説多ヲテ決勿思ヒ誤テ

釋語類纂序

古ヘ言詞ドモノ中ニハ容易ク解得ガタキ事ノ多ヽル我ガ國昭法師ノ袖中抄ノ類ナモ然ルヲヤ況ヤ學ノ道ノ開ケヽ今ヨリ見ンニ甚拙ク未シヽ思ハル説多ヽヲヤ清輔朝臣ノ奥儀抄ヲ主ヽ記ス物ヲ

古ヘ言詞ドモノ中ニハ容易ク解得ガタキ事ノ多ヽル我ガ國昭法師ノ袖中抄ノ類ナモ然ルヲヤ況ヤ學ノ道ノ開ケヽ今ヨリ見ンニ甚拙ク未シヽ思ハル説多ヽヲヤ清輔朝臣ノ奥儀抄ヲ主ヽ記ス物ヲ

ソヽ其ノ註釋ヲモテ

ソヽ其ノ註釋ヲモテ

ソヽ古ヘ事ヲヽ勘ヘヽテ學ヽ考ヽ

ソヽ古ヘ事ヲヽ勘ヘヽテ學ヽ考ヽ

類ヲ分チタラネバ

類ヲ分チタラネバ

今其言詞ハ更ニ建曆ノ皇帝ノ

今其言詞ハ更ニ建曆ノ皇帝ノ

八雲御抄京極黄門ノ僻案抄ケテハ古ヘ歌合ノ判詞ヲ

八雲御抄京極黄門ノ僻案抄ケテハ古ヘ歌合ノ判詞ヲ

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24　　ガラス使用

小ぐ〻釋せ給へる語言ぐも仲悉く集め五十音引分ちて歌學の一助ぐと但し是ハ其釋を載べく思いつまぐ然る閒暇無ぐまバ姑く其出所を記して檢索の便ぐ為ぬ扨又時も有らバ初念の如物をべく ちそけて世の古學する徒どもをまバ後世人の考説を のミ喜び是等の釋義ハ云ぐ足らぞぐて採も閧げるぞいぐも〻味氣なき其後世人の考得るぐが有るも其原ハ皆この〻る書等の上の為なる故いう ぐ今其も棄るよく〻有む假令後々の考説を採むも先その本より考〻見ばまバ後の善きあしきも辨知難き おぐなる故や然まバ實の學せ学人ハ末ぐのみ奉らぐて是等の書をも讀ミ考ふべきこばなる故ぐ歩喩し置くぶな〻

萬葉集作者部類序

世ぶ歌書ハ多くのまぐ獨萬葉ぞ然るハ是集ハ最古き代の物ぐて泊瀬朝倉宮ぬ御宇志し天皇の代首ぐして高市岡本宮近江大津宮ぐ御座ま天皇たちぐて次々御々代々の御製をも后妃ぐち皇

子たち又朝廷に奉仕らふ人々のハ更なり草野の民の
小臣まで甚廣く集へまゐる稀々小ハいさゝ湖洄と
て高津宮遠飛鳥宮の御代頃のをも載せるも其數そべ
て四千餘て其作者ハ四百餘出て種々の事ゞも見
えわたり上代の風俗をも知又御紀ゞも徴見て其
遺漏ゝゝ事をも補ふべき最珍なき書なりこバ故歌
學をする徒ハ論なし古の道たづぬる者も熟く讀
考ふべきなり云も更なる其總ての註釋書ハ既く世に此彼
あまた便思しのらばる其唯その作者此處彼處ゝ出て
誰々の歌若干あるやハ知り易らんを
彼傳説も索ね侘まだ今その作主ゝもを遺さゞ掲
し部類を分ち五十連の音の次第ゝ載せ旦各その詠
歌の長き短句及旋頭いづれの巻々ゝ若干集中そべて
若干首なる故委く記して彼道ゝ勤む徒の一助ゝ為
れをまゝ歌ハ有らばる名の出たる人々をも
因ゝ採て出同しく分ちて附録ゝす
うる書ハふと閲てハ何の興なくのしからねど事ゝ
當てゝ多くの書籍ゞも讀考ふる時々ハ要ゞ有る物な

る伐平常〻事調べ著述〻人等ぞ熟く知てたらむの
し

二史歌目録序

歌記る書ハ萬葉集を始め御々代々の勅撰そ私撰家
集〻至るまで世小甚多くの巳ぞ皆後のおて其濫觴よそ
上代の伐希見しくし珍たくし記し傳へらまそしハ唯古
事記や日本紀の二書ふなも有りそ次々古き御代々
雲の御詠をなど先千早振神代のそ抑是二史小ハ彼八
々の歌含せて二百首だくの巳載らまそるを長ぬあそ短
てあて是なるハて頭を旋らそあ又その長きそも
僅〻七八句あるあそ四五十句〻及べる有そ何まも
其調妙〻て面白しやも感のしやも更〻稱ふべき言辞
あらば然まバ古学せ者い更なそ歌道ふ志そ徒も必是
二書を熟讀そ古風を窺ふべきことばな固そ其専
書ならぬ伐以て紀事の中間〻往々記ぬましゆて一處
〻集しめら伐バ急ふハ索め難くハ二書共ふ見えた
るも各一書〻のミ載るるも又共ふ出る中ふも調
の異なる或ハ作者の傳への異まてるなぐも有て様々ふ

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』 請求記号 836-24
ガラス使用

る便考へ合せむ〻為るゆ
勞あるべバ今其歌ぐもの目録を作てその長短及句數を
載せ本書の葉數をも記して何ぎの歌も速ゆ檢出べく
ハ〳〵其歌の體裁の大概も知らるべく為し彼二書共ゆ
見えるる或ハ作主の異なる私ぐハ標識をもし　標註を
も加へ　無用なる煩勞あらで參考そべき便〻為し
又別ゆ二史の作者を合せ部類を分ち各詠歌の員をも
載て考古の一禪〻為せる私ぐもはて此有書作らむ歩も
直ゝその歌ぐも採出たら学ぐ便宜ゝるべきやうに
毎ゆ搜索の

云ひ思ふ人も有な学ゝの私ぐ否ぐ其ハ今彼歌ぐも摭
ひ出むハ甚易なるべぐ既く熟る書等世ゆ見充ら
ざるへるゆ實ハ然のミゆてハ事ゆらぬぐ悉本書の
其處々ハ更ゆもゝハぬ總ての文をも讀渉らねバ其
事情委〻ハ了解難く是ハ本書ゆ就て考ふるの勝
まるゆハ如ばさバあるも但し其歌のミ採出しも亦一の
助〻なる事ゆて偏〻廢べきゆハ非ぐ其ゆ備〻置て考
索の便〻為べきこばぐそうし

東路口唱序

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24
ガラス使用

今茲ゆくりなき旅寝の毛の下國より陸奥へ廻る
る折山川の狀險しく潔くて珍らかのおのしき地勢
らび其道路の間の事ども、思ふ由あて今度ハ漢風
記しつ戰爭なども有て最初のねぐらハ閒暇無くえい
ばのしや歌も詠出ぞ時々觸まてハそぐに思ひ寄ま
るふし無くしも非ずしのぶ物ら紛まて得録しかね置ば
そし我五月の中旬よそ塩原の里なる福渡戸ぞ號る地
ふ久しく淹留まるお守衛呼なぐ巡檢まる餘ハ旅寓ら
のみ籠勝ちて徒然なるまゝ日記の中書なぐ爲る暇

一つ二つ詠出しが百ばかり積そくたまバ佳らぬの
みなまぐ棄もも惜く例の類を分ちて此くハ爲しる猶
後々詠出たらむハ追継て録けむやに題の混亂まそる
ハ、然る故ぞ知る佬しけて此邊ハ山のみなまぐ古町門
前數巻畑下塩竈塩湯福渡戸大綱なふぐ此處彼處ぞ温
泉あそて夏秋の比なむ平常ハ甚しく賑たゝる趣なる
ば今年ハ世間騒しくて關屋への通路塞ぐまゝだ何地
も甚寂し然ハあまぐ頃日種々の花等開き光〳〵る中ら
江戸邊もそハ見馴ばるも有て美しく愛くなれバ或時

八身自も摘採て又人なども折らせて間断無く花瓶小挿つゝ觀るのみなむ旅寓の最好き慰さゝ八有りける。

家集序

余甚稚き頃詩礎ゝ云ふ物の家ゝ有りける女見てふゝ詩作も初て添削なぶ人さもたゞいらるゝを凡て慊を述へ意遣らむふ八磯城嶋の和歌おそ有ゞ皇國ゝ生出たるも者の是を閣て他國風學びむ八味氣無き事なりといで皇國風學びて其口馴たら廿後ゝ猶遑あらバ漢風をも習へる斯て後題ゝ依て又時ゝ觸まて詠るぶも凡て七八巻小近べる扨此度摘採て此くハ成せるなりて柿歌ゝ八代々の風有て互ふ得ゝる處あて其中ゝ善き悪き差別ハ八育る事なまで點る細ゝなる事ゝ令論ふ限ゝ非ぢ唯ゞ思ふ緒を寄来る隨ゝ言出しなるバ其體一ッならで左ぶゞゝ自親だゝ傾ゝるいはへ有ゞまぢ點ゝぶゝ棄も敢へでなむ侭是中ゝ戀歌の甚ゝ鮮きハ如何ふゝゝ云ふゝ是ハ已好ミて詠ばなりて是我猛く云ふゝ非悉棄つ詩礎なぶゝ云ふ物も歌書ゝ換てなむ皇國風をバ詠習へる斯て後題ゝ依て又時ゝ觸まて詠るぶも凡て七八巻小近べる扨此度摘採て此くハ成せるなりて柿歌ゝ八代々の風有て互ふ得ゝる處あて其中ゝ善き悪き差別ハ八育る事なまで點る細ゝなる事ゝ令論ふ限ゝ非ぢ唯ゞ思ふ緒を寄来る隨ゝ言出しなるバ其體一ッならで左ぶゞゝ自親だゝ傾ゝるいはへ有ゞまぢ點ゝぶゝ棄も敢へでなむ侭是中ゝ戀歌の甚ゝ鮮きハ如何ふゝゝ云ふゝ是ハ已好ミて詠ばなりて是我猛く云ふゝ非

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24
ガラス使用

で好まぬる事ハ何くれも思ひ寄らぬ更に強て詠べきおもふ非ざまバ強て黙もとて古歌をはゞかり忌べるおハ非ず總て戀歌ハ古昔よりも切なる情を麗たゝ〳〵詠居て感たきゞ殊に多有ず唯後人の詠ぜるハ甚卑〳〵濫ぞゝくて觀るふ得堪へで彼漢語の猥褻鄙俚〳〵云ふべたのミ毎多くなも最厭はき世ふ自皇國俗の祖ゟ為なる荷田宿禰の絶て詠まぼもしあて宜なる事ゆてハ有も黙らバ戀歌の雑まるハ如何ゝて。云ゟ是ハ若き頃題を得て詠るゟ少有る故其伏有るもなもを尾ゟる東唱集ゟ號るい上野陸奥邊ゟ杖しゟる時詠る等ゆて別〳〵二巻有なる中ゟを摘出しなり斯て端詞記るゟ稀なるハ世ふ有る類題てふ書めゝて家集の體ならぬ更〳〵云人も有めべなゞぬ是ハ花見ふ往てゟる時詠る雪の雨なるふなゟ歌毎〳〵記さむハ甚々煩はゝなゞ唯花雪或ハ見花朝雪なゞ悉て題詠の風〳〵言省ぎて記まバ彼を他も皆然を倩後ゟ詠たらむをも加へて猶精〳〵撰び採を世ふ存し置まく思ひ渡をゞ然まぐハ如何

有む

楢乃二葉序

何事も古ハ勝る〳〵後のハ劣る習ひなる中ゝ歌も
卅一字のハ三代集の頃ハ更なり今少し後々のも猶愛
るゝを何ぞおのれのあらむ長ゝ調のハ古今集ゟ
以還あらぬ體と為て甚しく劣るにより故今本や為
て長ゝを詠習ひしハ萬葉ゟ據らでハ得あらぬとぞ
まだ先つ頃玉籠といふ物を書て彼集ゟ出たる限を摘
採て部類を分ち初學の了解易ふる〳〵のしるべ為る
や為る其中ゟ六帖ゟ謂ゆる小長歌とゝゝべた短きハ
一節有て殊ゟ感しく會席なども
其參考ゟ供為ゝ七句のを更ゟ七句の數
ゟて次序で因ゐまバ卅句近の体ゟ
一葉と名け置つる体其ハ彼集ゟ種々のゝ有て事の廣
たゟ依てゟゟ有ま猶記紀の二書ゟ古く愛るゝゝ多
つる体其遺まるゝゝ足ぬ意すまゝバ彼一葉ゟ倣ひ短きを
て次々漏さゞ拳て兼て我二書の缺を補ふなゝ此餘ゟ
長ゝゝ續紀などゟゟ見えたまゝど例の調劣てゝ上の歌
等ゟ混ふ佶くも非ねゝ採らずかくて今摘出つる合せ

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』 請求記号 836-24
ガラス使用

て六十九首ありて是ハ二書ゐ載らまし處異同有りて別歌
の如く見ゆるも此彼あまぐ其ハ傳の異なると互ゐ字
句の脱などして然見ゆるとゐて全別なるに非ねバ是
等ハ一首ゆゑして算ふしなゆ然まぐ其中ゐ記の方宜く
聞ゆるゐ紀の方勝てて見ゆるも有て何まう原のならず
まゝ句の數ゐ從ひて二所ゐ出せまバ都てハ八十餘ゐ
なむ有べき其餘一首の如く書連ねし中ゐ二首な
らぞや見ゆるハさ無ゐ非ず其皆註て置め猶熟く訂し
考ふ俾しけて書の名ハ彼一葉ゐ繼て著せまバ即楢乃
二葉やハ名けつ然るハ同じ古言ゆて奈良の京の頃成
まる二ゾの御史ゐて拾ひ採まゝなぞぞうし

皇統正閏考序

伊邪那岐伊邪那美命の生成給し大穴牟遅少名毘古那
神の作堅め給ひし豊葦原の瑞穂國ハ懸まくも可畏
天照大御神の御言依しの隨ゐ皇御孫命天磐位我離ま
て築紫國ゐ天降坐しをて天津日繼天地の窮て無仇事
の如く彌繼々ゐ繁榮坐つゝ大御神の授け給ひし三種

の神寶我大御信物と為て御々世々ゝ傳へ給ひ其天位
少も動犯無く堅磐小常磐と天下所知看ん事小比類
なく尊しや尊犯御國風小称しき有りなる・倩志ゝ漢國な
ぞの習俗と違して異姓人の互小簒い競ふ如犯非く濫
なる事露程も有ねど假令幾千萬の御世を累ね給ふ
も何時も唯一系の御世繼と紛らはしたふしき有ば
る我世間小善事悪事更替る理ふし有まバ數多年の
來經る間小小甚犯乱を打雜らしなくやすく皇統も
も世人の思ひ惑ふ犯事なし自然小生ふる歟
ハ固と一統と小坐ませぞ世の擾乱ゝ依て別帝を立
参らせ或ハ御世繼の便と隨て大后の御政を攝ら給ひ
或ハ御紀を改刪らまし小依て御事跡の詳なら更為き
る多ぞ種々の事等有るゝ故小其真ゐるや否ばるゝや
の差別分難く為てゝ有ぬる乞其中小人の殊と惑
へるふし我少此小論もむ小元此天津日嗣小天下小唯
一柱坐まして先帝と御位を譲て三種の神器伝傳へ
給ひば限小縦や他と推て天皇と稱して仰犯仕奉
てむやゝと決て真の天皇小ハ坐ませ文元暦の御時す

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』 請求記号 836-24
ガラス使用

ら猶然て況て北朝の帝の如く臣下の私を立るをや
黙る我何なまばゆう世人真の天皇の西國ゝ南山ゝ御
座ますを除奉て非ぬ方我し正統ゝ思しるめる按ふ
ゝ是ハ京師ゝ坐まはばまば天皇ゝ非ぬ事ゝ為るをや
今の京ゝ柏原天皇の御時ゝ以降御ゝ代ゝ此地ゝ御
座ませばあて都ゝてハ有る我まま若他處ゝ遷て給ハも
くハ其御座まゝ地即京なるをや美夜古てふ言の義ハ
宮處ゝて天皇の宮敷坐地を云我て。阿波禮大抵後の世
ハ義ゝ。悖まる事多くる中ゝ黙しもし止事我ゝ天皇をし
も下ゝして己ゞ欲ゝ随ゝ立ゝし廢。し遠ゝ嶋國ゝも
へ遷し奉まる如ゝ逆事の生ゝつるゝハ凶事の中の凶事
ゝて憎しゝも憎き所為我然ハ云へば是ハ元来天
朝の御權の漸を下ゝ移まるゝ依て我ゝ若上代の如く
我らむをハ如此事有我もやハ過津毘神の荒びハ總て
浅ましく悲ゝものゝうら是ハ殊ゝ慨ても餘ある事な
てうしゝて俗間ゝ書ハゝも多らまぐ正ゝ御史の餘ハ
互ゝ誤を傳へる中ゝ唯大日本史ゝ是等の差別を甚
厳ゝ辺し録ゝまし可美史我まご何ゝ為も巻數多くて

初學の徒或ハ貪く忙しき者ハ容易く讀得難き
まゞ黙る事やしも得知ゑて手近き雜書の説をのみ
ち信ていと思し僻めるゝ多くの書ハ此類の事誰も〳〵讀
易く知易うるゆく記して示ゆもあれ其惑の漸次解ぬ
ばれおや彼と思惟てあや響き皇統略譜を著しつる
なき黙ハあまぐ其間便宜らし為簡小き物しつきが委
た事の知らまゑて尋常の書等と異なる所ある体不審
うるも有る趣なれば彼可美史ハ更なり其謬誤を雜へ
る考説の正た等き據て更き是書ハ著る仏て柳鼻や
も賤た身の如此事左右論ハむハ可畏しやも可畏けき
ぐ大御神の仕し給へる皇御國の驗霊うら〻直日神の
御魂幸して速く吉事ゝ更替てつゝ彼凶事を往談り為
給る隆盛た御代ゝ生遇て古道を歩る因り世人の惑を
解むや為給る真心の所為仏ハ罪免ゆるゝ事も有ぬ
ゆく若彼徒の楷梯やも為らバ天皇の大御恵ゝ報へ奉
る一端ニもはさ為なむうやゝ時うら開る菊花の露を研
ゝ滴ばてうち思ふ随を書つくるハ文久と改まる年の
九月九日

家迺風序

都て皇國ハ皇國の風あて我家ハ我家の風あるこゝ
ゝろを古人ハ心朴直ゝゝして而も敦厚く家格舊例ハ更な
て世の習ゝしといへごゝも為来たし事ハ堅く守て猥
小類すこゝろごゝハ無てしを世の降ゝ㐂人のに薄
くなり賢ら心ばへ増ゆて祖々の遺ふを憚らずと
もすれバ我意ゝ任せて其壞てゝ改悪しと悪しとばなゝと近た頃ハ世間西の國風ゝ移り
ゝのみならず士族ハ殊ゝ貪くなて何事も手廻らぬ
とて勢盛ばこゝを得ずとかくすゝ聞ゝ老者ハ失
せ若輩のみゝ易てゆくゝゝら家格為来たなどゝ云ことハ
聞も知ずなりて終ゝ形も無くなり為なじ歎ゝしけれバ
予覚ゝ概略を書記して子孫ゝ貽すなり抑世の習ハ
しかハ後世ゝ始て止ゝも悪ゝらぬ事ゝり又古ゝ根
據あて存し置ま欲た事あり其ハ能く書籍どもを見
て辨ふばた事ゝ有ゝを彼若く賢らなゝ輩の物をくも
得知ぬが何の撰びもなく故事ゝらし云へバ一向ゝ改め
変りゝを猛た事ゝ思ひたりゝハいかゝも〳〵浅ましく善

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24
ガラス使用

ふなことなど況て重た家格舊例をや能く慎んで家風
を守り努(ユメ)祖宗の御心に違ふはじとたゞの我
齊明紀童謡後釋序
御紀に載(ノセ)されし童謡の有が中に此謡ハ解難たくて
故と書乱せる物と思ひ文を置捨などして辛く釋(トキ)まぬ
あとそれ訝(イブカ)る人も無く又更に解明らめむとも為ぼ
しらや其事を申し世に聞えぬを私記書つらなと覚ゆ
る頃ほひ六七百年を歴て圓珠庵の阿闍梨の解(トキ)あり
ハ希見(メヅラ)きをとらへた物から猶舊説に泥(ナヅ)むと荷田の

翁い正した天皇の御世(ミヨ)継記(ツギカケ)る書(フミ)も然(サ)ル謎(ナゾ)をめたしゝ
事有べうらずして文のまゝに讀解(トキ)しなむ健(スクナ)くて
たゞこゝろハ有なる怙ハ忌(イム)ばかる事あるをゞ顯(アラハ)ハ記(シル)
す故と書乱せる物ゆゑ心に着(ツキ)て此く釋(トキ)為しハ尋常(ヨノツネ)
のことならず甚(イト)深た思慮(オモヒゲナ)して其勞(イタヅキ)を棄(ステ)難たくぞ今平
心に思ひ見まバ是(コレ)ハ何(イカ)ゝも解し得ばをしを出し
奇説ゆて其實(サ)然(サ)ゝことゆらぬハ此紀のすべての記し
狀(ザマ)ゆて著(ツケ)く翁の説浅たゆ似てなゝ正しく古意(ココロ)
合(カナ)ひゆらむと思ゆればなり唯惜むべたハ古昔創業の

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24
ガラス使用

稚きい今を見れば打傾ふびいの雑なり
ど何事も始より整い備はることかた難き習いおろか人
くの見識いた異なれが然も育ぬばきこゝ仰りけて是
とて後は誰も〳〵大抵此説の如くおもひこがおゝ意見を
加へつまどゐ得失有て全解得ぬと見けるが無くが
甚嗚呼なれど故翁を初其後の人〳〵の説の善と思ハる
いを撰び聴見とを添て此巻ハ記し試るなり卜ほど普
とり人〳〵の解難めるを容易く明らめ行ば
れ猶熟〳〵考見て誤まるハ疾く訂し足ハぬハ次〳〵補ふ
ばくこゝ彼此謡解初し人の見るらむくハ何ごゝら
むこゝ心置まずも非ねど黙し難くてなむ

萬葉集追考序

古へハ種々の珍たき書籍どを多くなむこゝ日本紀ゝ
引載給へるを一書ゝてゝ推量らるゝと禍津日の荒びり
大抵亡逸て名ゐゝ聞えずなれるゝ育が中ゝ萬葉集の
全くて傳ゝて来るハ言霊の幸ひ助くるゝ國の験ゝし
て古への質直ゝ雄々ゝくゝ而ゝ雅びくるゝ意詞を今の世ゝ
在ゝ現ゝ知らるゝ最ゝ貴たき親書なるゝと惜たき数多

の足溜を歴ゐる間ゝ書寫す手ゆ損ふまゝ字の誤と訓の訛と出來字句の脫などもありて古の狀こもあら史然しも美しき意詞も陰夜の鬱しくなりぬるが多ゝるを中昔仙貴律師此集ゝ勞れて宜くハあれつゐど猶至らぬ隈々多く其後ハ由阿などの餘を仲〳〵取ゑる人も無く云久しく埋木の世ゝ埋れてのみ在なゝを希見ゝかも契沖阿闍梨是が誤を辨へ訂し詳細ゝ註せゝゝり其意義明うゝなり初めゝを追つだて縣居鈴屋の翁たちカと極めて讀解仁五十槻園其餘の人々も同心ゝ勤てよゑ漸大虛の陰も晴ゆれて清なる月影を眺むゝ如く殆古へ立歸まゐなむ大しき功ゝくハ有ゝなゝ仏て其〳〵の考説等を稀ゝハ打傾ゝゐゝも無ゝ非ねど然すがゝ動くはゞしく能くも此うハと驚かゝゐゝでかゝ感たも多く仏ハいへど各〳〵此道の學ゝ深ゆ志ごもゆて卷々の訛謬を訂正し置き更ゝ熟賢もてゆく仏何ゝせむ卷の數二十歌の數四千仏餘ゐゝ書なれば其考の漏しも又此くそやと迫ハ打出なゞら決め難ゐゝと育て其誤清くハ鏽ら史不審く覺ゆゝ節々猶勘ゝ

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24
ガラス使用

らぬが飽ぬ意すゝバ其反覆考へつゝ思ふ由を片端を
て書付るゝ其件五百ゝ餘ありて已ふく全書の註釋録す
ぢ紀意構なれど事繁くて急ゝハ成難なれバ先本文の
訂正ゝ係ゝ條々のゝ摘出假ゝ書淨め試むやゝ思なり
て筆執るはゝ穩帖ならぬハ多ゝ省ゝ件誤ありハ正しな
ど左右十ゝ間ゝ何しゝも紙の數積てゝたれバ釐て五
巻ゝ為し追考ゝ題ゝて著述の自ゝ負ゝ異ふゝなゝ然ハあ
れど彼世ゝ聞えたゝ大人等の考説ゝすら打傾ゝ
が往々有なゝ況て學の膚無ゝ已がすはびゝしあゝ
バ却の非説のみ多ゝゝ紀ゝを其ハ漸次改しもすだく
ゝ遺ありハ次々の巻ゝ載せ此く為つゝ篇ゝ重ゝ終ゝハ
註釋ゝ成てむゝ負氣なくも彼大人等の志ゝ継だ幾
許ゝなく已ゝ書籍どゝの中ゝ千年の久した缺ゝ
遂ずて傳ハて来ゝゝ最ゝ貴き親書ゝ薄記陰ゝ有せじ
ゝ本考ゝ書了ゝゝ因燈の下ゝ筆ゝ走らせゝく事の由ゝ
書誌すハ

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24
ガラス使用

荻舎集

文部下

十

836
8
24

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24

ガラス使用

荻舎文集下巻

詣先塋記
觚鏊記
古畫記
美豆舎記
書案記
觀小金井花記
鈴木重家書翰記

大正
9. 6. 17
購求

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24
ガラス使用

於烏辨

拜伊奈波神詞

拜天照大御神詞

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24

ガラス使用

詣先塋記

雲ゐなる遠祖の事ゆかしく萬よろづを委くしらまほしけれ
ばなほ我東雲君の御上ふし　勘ばへつゝ遠き昔なら祝
ぶ古記ぶみの焼亡ぬるなどして不知火の知らさぞ為ぢ
ご多かる中ゝ其丘墓處も家譜ゝ伊勢國牛田村桂のか
うはい寺ゝ有て其牛田村ハ長嶋の近き邊なるよし見
元たまぶ文字ばへ詳ならばさハ況て勘ぢ寺の今も有
てや無しや春霞いと曽東なく比年心ゝ掛てそ思も有
らバ探ね訪ま欲く思ひ渡てけるを計らばるゝ嘉永五

年ゟ云年の秋我君の百小竹の美濃國ゟ帰て給ふ従者
ゟ加へらまくのバ今度おそく思い起ちて豫て其趣ま
をして身の暇を賜はて置き其帰さゟ伊勢よて尾張ゟ
そのして尋ねけるゟ牛田村ハ津嶋よて冠守へ往く道
の右の方二三町ゟ在て此處ゟ牛田氏なる人の有けゐ
ゟくと傳へたまバ行て問へゐゟ今ハ無しゟ云へバうし
なく立出て寺を尋ぬるゟ冠守よて萬場へ往く道の右
の方二町許ゟ天桂山廣濟寺ゟて有て此處やぶて桂村
ゟて家譜ゟ云ゐゟ甚よく符合へ此邊をべて尾張
國海東郡ゟて伊勢國ゟハ非ぎ折〳〵尾張ゐる我伊勢
ゟ傳ずうハ何ゟゟ云ゟ此二國ハ東西ゟ隣なて彼長嶋
ゟ此邊ゟハ一條の川を隔てしのミゟて甚近く相接ゐ
地なまバうくも語て傳へし物ゐるなく又如此見えた
ゐゟ據なて考ふまバ此邊舊ハ伊勢國ゟ隷なしゟを有
ゐなば其ハ谷川氏の説ゟ鴨長明が伊勢人ハいぶかと
云けて津嶋よてかし河往けバいづミ野の原ゟ詠ゐ歌
を證して津嶋も舊ハ伊勢ゟ屬なしゟや有ゐを思い
合せなば然ゐ例他國ゟも此彼有てうくて此海東郡ゟ

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』 請求記号 836-24
ガラス使用

云ふハ和名抄國郡部ニ尾張國海部阿ツ見元た留地名
ゐを何の頃よりの東西ニ分ちて海東海西二郡ニハ為
るゆゑけて寺僧ニ逢ひて猶よく推ぬるニ俗の語りけ
らくハ此寺ハ織田勘十郎殿の開基ニて舊ハ方八町の
御朱印地なりしを後ニ没収せらるゝて纔ニ伽藍の地の
ミを存ぢぬ ゝ云へて駄ぢゞ猶大きなる寺ニて境
地の狀往昔を想ひ像らる此織田勘十郎 ゝ云ふしハ
信長公の弟信行主の事ニて當時織田氏此國を領ふも
しゝバかゝ此處ニ寺をも建らるゝなりかくて此信行
主ハ永禄元年の春信長公ニ害ひ給へるゆゑ此寺を創
らるゝ〳〵天文弘治の頃なりけむ ゝ推量らるゝ ゝて
東雲君の御上を語りて尋ね問ひしニなるニ遠き世の事ニ
し有ゆゑ奥墓も知らず過ぬ帳も古きハ焼ぬなりて僅ニ
取ひろひしを閲ゆゑもげニ近き世のふりて云ひふるくハ都
て確なる證を得ざゆゑ甚本意なるくハ思ふ物ゝら縦や
標識の石なりくハ先ぬゝる譜第ニ録せる處正しく此寺ニ
て君の墓所なるおゝいはい村行ち少も疑ひ無ゆゑ即心
ばらへの香花料を寄附て猶よく考標給はるばしゝ懇

切ふ頼ミ聞ゆきバ甚よく諾して是ハ殊勝なる御事なるを何でうハ疎略なるべき好き、證據を得バ速ふ云ひ遣ほぢきよう真實ふ云へきバ喜しく歸る山返はひ頼ミ置て歸まるハ同年の九月十四日ふなむ有けるはて君のお能を給いし寛永十二年と云ふ年より二百十八年ふ及べる今しもうく訪い得つるハ春の夜の朧の事なら受幽ふ君の導き給へるふやふ畏しなが云ふむ愚なるてうし

今度江戸を發出しよふて歸まるまゞの總ての事ぶもハ委曲ふ記せるぶ久佐麻矩羅ふて三巻有なむ是準ほう思ふ音あてて其書ふ委くふ云ハばつきバうく別ふ書しつけて子孫ふ貽さふなむ

貝兜記

我家昔よりて一つの兜鍪を傳領て其ハ何の裝飾も無き尋常の鐵盔なる故前の方ふ大きなるいたや貝を被らせたて俗ふ謂ゆる立物ふも非ぐ希見き作狀なる故治工ハ詳ならばまぐ甚古き物ぞ見元ぬる錏ハ三枚ふて

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24
ガラス使用

黒漆ゐて塗て勝色の絲もて大荒目ゐ威し吹返ハ浅葱
ゐて包めて但し是ハ後ゐ造て添へ給ひしゐて舊の
ハ何るてけ共詳ならず笠標も有まぢ是も後の
ゆて此甲鎧ハ世ゐ隠きるき速水甲斐守時行朝臣の遺
物ゐて此朝臣ハ羽柴氏ゐ聿へて謂ゐる。七隊長の一人
なる我此甲を冠て戦ひ給へる状を秀吉公の見給ひて
甲斐守が貝の兜を被てかくばかりしく働くぞ毎ゐ稱譽
給ひし由語て傳へぬ一説ゐ此讃美給ひえハ東照大
神なるをゐも云へていとしき事なるて斯て羽柴氏ハ秀吉公
の一世ゐて隆盛るてけき公の薨て給ひし後ハ人心擧
東ゐ靡きて漸々ゐ衰微つい世ゐ頼ミ無くなりぬる我
始終ゐも心を變へず元和元年五月八日遂ゐ其難ゐ殉
ハまてハ古の名臣等ゐも恥る事なき忠節人ゐなむお
くしかりけるゆて兜鎧ハ和名抄征戦具ゐ説文云冑ハ首鎧也
和名加布度ゐ見えて上代よりの戎具なるぢ其始ハ詳
ならず名義ハ加夫ハ頭ゐて登ハ鋭ゐ義ゐぞ契沖云へる
頭を加夫ぞ云へる例ハ古事記應神段の歌ゐ加夫都久麻
肥迩波阿旦受ぞ見えたる加夫都久ハ頭衝ゐてまた頭

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24
ガラス使用

揃叙を神武紀の歌ゐ句勢都々伊神功紀の歌ゐ句夫苅
智ゐ育て被るを頭入の略語なて此説然る
ぱし和訓菜ゐ頭ゐ被る物をまバ名ゐ委し
うらぜ貝ハ和名抄亀貝體ゐ尚書注云貝水物也和名加
比ゐ唐韻云殻虫之皮甲也和名與貝同ゐ育て名義ハ
和訓菜ゐ卵ゐ同じ芽ゐ義通へ云ていたす貝ハ和
名抄亀貝類ゐ新抄本草云文蛤表育文者也和名伊太夜
加比ゐ育て本草和名の説を同じ但し是訓ゐ字義ゐ非
ぞ按ふゐ伊多夜ゐハ此貝の平く大きゐて襞積ある状

板屋ゐ似るまバ名けしなるべし夫木集ゐ見えたる信
實朝臣の歌ゐあやうくもうら希児き板や貝苔蒼く海
人の習ひならぜやゐ育るハ熟く此義ゐ合て猶簾貝
枕貝溝貝千鳥貝雀貝なぞも悉その形像の似たるを以
て負て名なる故思ひ合せべしかくて此兜螯の我家ゐ
傳ハもる、ハ已ぐ八代祖東雲君の室見室君ハ此時
行朝臣の息女なるしるバ幽契育て其由来ハ
朝臣卒去給ひし後何處へ逃けるや東雲君なるけも
或民家ゐ異形る火爐の有りしを何心なく見給ひなる

小紛ま
も なき此兎
なそらこのバ即買得給ひしぞ是ハ
難波の戦の後鈿なども失なまゐ
も民家ハ無用なまバ火爐ぞ為て有りしなるべし此事
の主紀ハ傳へばまぞ東雲君なそけむぞ思ふ由ハ假令
此物存きそぞも鈿と何と故のまゐ
有らハ乞あま思ひ寄らばる民家ゆしうへる状ぞ有り
なむハ見知給ふろうへならでハ為し得難きこばなま
バなそ又此民家と何處るそけ世ぞ知そ難けまぞ難波よ
そ程遠からぬ地ぞてハ有しなるぞし莫ハ放ま逸ぬぞ

も黙バ
ぞそ遠くハ行くまじけまバなる都ぞ此主月國
呼るぞも蒼ハ諦ぞ傳へたそけむを今先へゐはぞ遺憾
なま抑ぞく此兎をし不意く得給ひしハ神物の得埋ま
果ぞ顯まぬべき時の矯まゐふも有るぞくハる此器の
終ぞ亡ぬぞきを朝臣の殊ぞ惜ぞ給ひて深き縁ある我
家ゆし故ぞ帰せ給ひし物ぞ思ゆる貽るハ假令此器
の亡ぞも民家ぞ用ハまならむハ何のいふ無きこば
なるを人ふとも多有ぞ我祖の心敏く見出給ひ二百餘
主を來經ぬる間度々の災をも免まて今の現ぞ傳ハま

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』 請求記号 836-24
ガラス使用

るハ少縁ならぎ甚と奇しく甚と悦しきおゝかもあり
けるはて此傳來の説ハ語て絶ぬる趣あるを耕田阿禮
が記憶るく終ニ紛ま失むあゝの惜く後世の證ゝ
聞持るまゝ稗記ゑ因ニ少已が考説をも書加へつゝる
なり。

古畫記

我家ニ傳來まる物の中ニッの掛軸あて一ッハ堀川夜撃
の圖一ッハ衣川闘戰の圖なり共ニ金碧の密畫なるを世
ニ絶まれる上工の筆ゝ見えて七百年ニ幾き文治の昔
を面前見る心して感きおゝ云む方るし黙るニ多く年
所を經つまバ黒ミ煤けしハはるものゝて丹粉の脱な
ぐして損ハまし處跡うらぎ甚惜きおゝなもうし其大
き竪ハ共ニ九寸ニて横ハ堀河の方一尺二寸八分衣
川の方一尺一寸二分あて但し是ハ背標せる時四方を
截しまゝの見えたるはて圖の概略を云ハゞ一ッハ京都
堀河の館の内ニハ義經朝臣烏帽子淨衣ニて太刀を側
ニ脱ぎ置弘肱枕して寐給へるを平氏なるハの女の
呼

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24
ガラス使用

覺し居て此餘かの人氣るく門ハ二重なる杖共かに閉き
る乙外かハ數多の兵士楯を衝並べ弓箭太刀薙刀を執
乙て陰かに内を覗いつゝ今や撃入まじき張賜して立て
楯かい誰ぐなら廿一輌繪ゞ酸醤草の紋を畫るが有てう
くて此圖ゝ見元たるハ義經朝臣ゞ女房ゞ兵士、二十九
人ゞ總て世一人るて一ッハ陸奥衣川の館の邊ゝて兵士
數多戰い傷ら廿なぐして人ゝ馬ゝ一ゝ
為て此處彼處かに休き卧し或ハ頽い或ハ甲ゝ釋ゝ首
又むゞ為るゝ有るが中かに獨孤慶ハ隍墅の中かに薙刀を
倒かに杖て立て是ゝ廿ゞ俗かに立往生ゞて只碑かに傳ふる處
るるうくて此圖ゝ載たるハ半身見元るるゞ共かに總て
十五人ゝて右邊かに步出るる兵士及馬の足尾薙刀な
ぐの狀烈しく戰へて廿ゞ知らまて今少許あら
バゞ甚口をしけて堀河の夜撃ゞ云るハ後鳥羽天皇の
文治元年十月十七日の夜頼朝卿土左坊昌俊をして義
經朝臣の居給へる六條堀河の館を襲い撃しめ給へる
ゝ時しも其處在合ふ者甚寡うて防ぎ親健く闘いて
六十餘騎ゞ聞えぬる敵兵を敗走しめ給しゝを云ふ又

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24
ガラス使用

衣川の戦ひは同五年閏四月晦頼朝卿の
の押領使泰衡主數百騎の兵士を遣て義經朝臣の居
給へる衣川の舘を攻撃まゐらせバ朝臣の兵士多く討
て其身も沒給ひぬるを云ふ他て朝臣の此地ゐ居給ひけ
るハ都を去て後是國ゐ下て秀衡主ゐ依て給ひしかバ
主の計らひまをしてなを一説ゐ朝臣此處ゐて死せ給
へる偽して實ハ竊ゐ蝦夷の地ゐ遁ま給へて故夷人の
今なゐ其靈を崇め祭まつりやう云ふ是事義公の大日本史
ゐも録ゐま新井君美主の蝦夷志ゐ見えて然る事や
ぞ思ゆるまゐ辨慶嘯やう號る地育るよう志ゐ見えたて
然まバ此僧ゐ從ひて遁まし事知るべし彼ゐ碑ゐ傳ふ
る處もし實ならバ故や業人を作てて墅の中ゐ立置し
なるべし抑平家を亡しつるハ大抵此朝臣の功業なる
を賞給ハるのミならず斯まで尓憎まゝしハ子孫の
為を思はまし所以ありてハ有ぬべけきや餘てゐ枝葉を伐
て盡して其幹遂ゐ枯なるゐ頼朝卿の過失ゐて甚ま
し犯しばなをうそうくて此畫ハ六や二條の城なる殿
中の壁のなをしを一年城の隅ける時焼亡も事を惜ミ

て剥取し物なるべきこと是ハ何許の事なるかの詳ならず天正十年六月二日明智光秀叛逆の時織田信忠卿誠仁親王の御座まし/けるニ條の第ゟ櫓を縦て覗せ給ひし時の事なるべきを縦くハ訛て傳へしや猫よく考ふべきものぞかて此圖ゟ依て推察まバ彼壁ゟハ源平二家の戰を委曲ゟ畫て有しなるべし洽く畫き列祢たる古當時の狀想ひ像らるるまゝ此畫風狩野ゟハ見えぬまゝ筆ゟ者ハ詳ならず往日我先公の見給ひしゟ是と同じ趣ゟ伸ゐたるゟぞそなはりて板谷桂意ゟ見せ給ひけるゟ殊まゝ古き筆ゟハ有まゝ誰なら/ず知て難しと答へ奉るにぞ/ゟが更ゟ狩野家ゟ見せ給ひしゟ是と同じ趣ゟ伸ゐたるゟぞ何まゝまゝ甚古き人のなる狀不意く兵燹を免うまて今の世ゟ見存まるゟ我家の福のミならず筆者の幸ぞ云ふべけるゟ

美豆舎記

己ゞの屋號を美豆舎ゟ呼るゟ何の深き理を無きおゝなるゟ其故ゟ美豆てふ語

ハ物の美しきを云ふなるに況て天皇の大宮の號小稱
せる事も有を以て葎生ふ賤き屋をも然命けむハ負氣
なく當ㇾ難しㇾ思いてなをけまじ是ハ謂有る事なる
ㇾ其ハ先古く美豆ㇾ云へる例甚多へのる中小稲の事小云へ
る八古事記小天照大御神之命以豊葦原之千秋長五百
秋之水穂國者我御子正勝吾勝勝速日天忍穂耳命之所
知國言因賜而天降也神代巻一書小天神謂伊弉諾尊伊
弉冉尊曰有豊葦原千五百秋瑞穂之地宜汝往循之云へ
瑞此云彌圖また一書小天照大神云へ因勅皇孫曰葦原
千五百秋之瑞穂國是吾子孫可王之地也云へ祝詞小も
豊葦原乃水穂國ㇾ瑞穂之國ㇾ所々小見え大嘗會
の中臣壽詞小皇孫尊波高天原仁事始天豊葦原乃瑞穂
乃國遠安國止平久所知食天都日嗣乃天都高御座仁
御坐天天都御膳遠長御膳乃遠御膳止千秋乃伍百秋仁
瑞穂遠平久安久由庭仁所知食止事依志奉豆
食由庭乃瑞穂遠四國ト部等太兆仁ト事遠持豆奉仕留
云へ玉の事小云八神代巻一書小素戔嗚尊將昇天時
有一神號羽明玉此神奉迎而進以瑞八坂瓊之曲玉また

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』 請求記号 836-24
ガラス使用

一書小大巳貴神云、吾將自此避去即躬被瑞之八坂瓊而長隱者矣宮殿の事小云へるハ祈年月次祭等の祝詞小皇御孫命乃瑞能御舍仕奉氐大後詞小ハ美頭乃御舍大殿祭祝詞小ハ瑞之御殿ゝ育て古語拾遺小伐大峽小峽之材而造瑞殿古語美豆能美阿良可古事記小御眞木入日子印恵命坐師木水垣宮治天下也崇神天皇紀小三年秋九月遷都於磯城是謂瑞籬宮紐の事小云へるハ古事記玉垣宮段小又問其后曰汝所堅之美豆能小佩者誰解盃の事小云へるハ同書朝倉宮段三重娵が歌小美幣能古賀佐々賀世流美豆多麻宇岐尓宇岐志阿夫良是ハ三重の子ゞ指擧せるミづ玉盃小浮し脂なて樹木の事小云へるハ萬葉集巻六小水枝指四時生有刀我乃樹能又十三小五十槻枝毋水枝指秋赤葉が見えるて此類なお有ル事小水瑞美頭美豆なゞ種々小書たまゞ醫師詔なる故ゝ併見て著し斯て其語義ハ冠辭考小美豆てふ語ハ先ハ若木の若く美しく榮ゆるを云よて萬物を讃稱て美豆云ゝゆハ云けらし萬葉小槻木小水枝指ゞ詠て世小ゝ若木を美豆木若枝をミづ枝若く健なる人をミづ〳〵しなゞ

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24
ガラス使用

云を思へ又云遠江人ハ檀をも今俗の用の木てふ木を
も其餘ふも常葉なる若木の青々ゝしたる枝總てこづ
木ゝ云て古語の存まるその名なて水ゝ育るが如しはてらく
瑞乃御舎水垣宮をゞ称せるも有ゝ依て僭號なり
ゝ為むハ丕ゞ其ハ上件ふ示を如く是ゝ何ふまき物を
賛美たる語ふて宮殿ふ局まるふハ非ばまばなて然き
ゞ若く美しを云ふ語なまバ奥賤き屋ふハ似げなし
ゝ思はむハ黙るおとるなたらく呼る謂を云活し其ハ
物學ぶ徒の舎園ふ命くるハ世の常の習なまバ已もゝ

ハ思ふ物ゝら故ゝ撰ひなゞ為むも煩しく又むなく縁
なき名を負なきふも非ねゞ唯速水の水を以て呼ふら
ずして即美豆舎ゝハ命なしなて然まゞ水美豆ゝ同
語なまバ姑く彼義ふ採なむも難あらじ其ハ鄙て物の
名ハ稱美て負るゞ本義なまハ縦や臭き舎ふも有まゝ古
の意ふ合へバなて又瑞字ハ美豆の義ゝハ當らばまゞ
是字を用ゐるも久しなまバ借て書むも何事のあらず
まおゝ水の義ハ和訓栗ふ實るの轉せるならむゝ云へ
て故又按ふ彼賛美て云へるも美豆も此水ゝ同しく満足

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24
ガラス使用

き号義なら学も知るべくのらぞ本なぞの若く美しれ
即満る義あて黙きバ是ハ何くまで自然の嘉號にてハ
有りける偖是ハ此有由緒を知らぞで異ミ思ハむ人の為に
市其謂を記るなる我此旨趣をし得たらむ人ハ益なき
贅言ゆ覧為むのし

書案記

我友米澤行ハ其性書を好きて已が美豆舎より時々訪
来て何くまゆ物語らふ若人なる体何ゆ為だてなむ冊
後國天楳立なる松の材を得て書机り為むゆを今一ツ有
なる我已く我奥てむゆ云へて拆此天楳立の事ハ彼國の
風土記く奥謝郡郡家東北隅方有速石里此里之海有長
大石前長二千二百廿九丈廣或所九丈以下或所十丈以
上廿丈以下先名天楳立後名久志濱黙云者國生大神伊
射奈藝命天為通行而梯作立故云天楳立神御寝坐間仆
伏仍怪久志備坐故云久志備濱云くゆ見元て固ゑて由
緒有る地なるゆ此邉ハ往昔我君の弊し治て給いて祖
の居給いし呼縁ゆ有なきバ平生ゆ甚ゆうしく思い
ひしめきる我今此有物をし不意く得つるなゑ彼濱の名

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』 請求記号 836-24
ガラス使用

ふ眞ふ奇しく本意有て思ゆるゆゑ已はら愚劣な身ぞ既
くよて古昔を偲びて皇神の道を歩み　其一端をも
知ま欲く勤ミ吾まバ是即此道の高處ゆも至てぬべき
楷梯なるふやゝ甚慊しく直ふ乞得て同形なる書案ゝ
作して朝夕の學び敵くハ為つるなて偖此梯立の事な
ぶを常人ハ甚く疑ふなぞ播磨國ゝも此類の石橋あ
るよし其風土記ゝ見えて決ふ浮たる事ふバ非ず其ハ
彼大和の天香山まゝ美濃の喪山等の故事を思ひ合せ
ても知らまぬだきとばなるをやゝ古昔の道の奥處も求
むるき是や椅立の松の書机是ハ文久三年ゝ丗一年の十
二月廿五日なて

觀小金井花記

他國ハいゞ知ず東の都遠くて上野の岳陽田の堤な
ゞハ其程遠ゝらねバ往見め春も非ざ仍ゑと獨小金井
の花かしゝ早くゝゝ聞渡まゞ道の程近ゝらで往べた
聞え得ぬ間ゝ隙行く駒の足疾くあらたまの年月往交
て我齢傾ゝくを此くのミ默し居て見ゑ為ん心も遺
憾し今年ハいゝでゝ春霞立初し朝をて青柳のいゝに心

寒(サム)き悪(アク)風(フウ)と常(ツネ)と異(ケ)り空(ソラ)の三月(ヤヨヒ)の末(スヱ)を俄(ニハカ)に暖(アタヽカ)く
て四月(ウヅキ)立(タツ)すなもち小(ヲ)何処(イヅク)の花(ハナ)も咲(サキ)初(ソメ)れば心(コヽロ)頻(シキリ)に苛(イラ)
だてど例(レイ)の事繁(コトシゲ)くて一日(ヒト)二日(フツカ)と過(スグ)る程(ホド)に單(ヒトヘ)の八(ハ)疾(トク)く
散終(チリヲヘ)ぬあハ仁此春(コノハル)を亦(マタ)かく無(ナカ)りけるとつぶやうゐめり
時しもほととぎすいふ小金井(コガネヰ)の花(ハナ)と見給(ミタマ)へや此間(コヽ)住(スム)つ
る者(モノ)の云(イヘ)ハ思(オモ)ひもよらぬ似(ニ)更(ヨ)未(イマ)しかゝれた十六七日(ジフロクシチニチ)の
頃極めて盛(サカリ)ならむと云(イヘ)彼所(カシコ)のハ漸遅(ヤヽオソ)なれば然(サ)も有
めぐしと何(ナニ)ゐくさうち出しかゝ驚(オドロ)かまほしくハ
思(オモ)ひ棄(スツ)れど非更(カヘ)歸(ラ)さハ暮(クレ)なむも何(ナニ)でふ事(コト)ぞ有(アル)む明(アス)
日と過して定(サダ)め仁行(ユク)身(ミ)のいつの春(ハル)をと待(マチ)めでたと實(ヨヒ)
ぐ心(ココロ)構(ガマヘ)へ去つ明日(ツトメテ)起出つゝ空好く晴(ハレ)れば弥(イヨ)心
勇(イサ)み朝飯(アサメシ)もそゝくと食(モ)せて車(クルマ)を乗(ノ)て走(ハシ)らす今日
ハ物休む日なれば氣(キ)など互(カタミ)に携(タヅサ)へて行(ユク)人多(オホ)し吉祥
寺と云村(イフムラ)にて憩(イコ)ふ此呼(コヽ)り井頭(イノカシラ)への導(シルベ)の石あり其所(ソヽ)の
池ハた見(ミ)まほしなれど花(ハナ)を引(ヒク)ゝ日(ヒ)ハ又走(ハシ)り花(ハナ)
見歸(ミカヘ)りの人(ヒト)遇(アヘ)り是(コヽ)ハとて庵(イホ)ゝ宿(ヤド)りしかくてば
辰(タツ)の時過(スギ)ぬ木(モト)の下(シタ)ゝハ到(イタ)り着(ツキ)めやがて下立(オリタ)て眺(ナガ)
むるに盛過(サカリスギ)しも無(ナ)きハ非(アラ)ねど實(ゲ)に大抵(オホカタ)宜(ヨロ)しき程(ホド)にて

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』 請求記号 836-24
ガラス使用

白花有て薄紅ありはぎ〳〵枝を交し流れに臨て咲續く工にて畫にも繪にも似たて幾らもあり其橋の最中に立て暫ばまし見遣たる景色云む方なく彼上野隅田はて八飛鳥山なご谷其趣を異にしてをうし からぬハ有ざれご此所ハ五十町ばかりを間水の神頭咲艶へりとくいと希見なれバ我ふるもあらぬ歟ぶ立て野中と云邊ゝ来つまバ人影も見え更ねこハ来過るなりと心着て立戻るに露程も遠と覺元更小金井橋の邊ゟ至りて何處もあらめ狀ながら此とくり

なし殊に眺望ハ勝てるゆゑバ碑も此所の家なごも有て人多く立竝たるまばゆきばかりの堤の花乃蔭ゐる牀几に上りて憩ふも端ぐめるおうな木の芽煮て持花ぬれバ折見遣つゝ檜破子披ひなごす甚樂し歌めたるも言ごと何くれごと吟そるいも鳴呼ぶまくく水ゟ栖も蛙の聲ゝハ劣ゐること恥しくて箱ぬ柳多摩川の水源ハなまゝみの甲斐の國ゟて此流を引しハ今ゟそ二百餘三十年ぜるて昔承應の頃なること岸の櫻ハ其ゟり八十年後川崎葉が

栽しおて薄紅なるハ芳野の種白たハ常陸なる櫻の
なりと云ふ然るに其樹年を歴て老るに朽もせざるに依て
嘉永の比植継ぬとぞ其初のほどや半朽ながらもでるく
咲るも此彼あてかたの呼名を見て知らで徒に過去
しことをいと悔しく今日一日だも眺め暮はま欲なれ
ど此呼に留るばきりもあらねバ又の春を契りて立歸り
そのうらに残りて顧のこゝろ為らぬ往来の櫻の枝々
何となく有も掲げし物あり寄て見れバ花見の栞にとて
くのせる此邊の繪圖なりけり契りし車の空うから受
ハ又の度の導をと為にとて一ひら買取つゝ此因ゆ
井の頭の池見むと流に添て下ゆくに道狭くて車牽ね
あへねバ歩みに歩む林の中路一里餘もや来つらむと
思ふ頃辛うじて其傍に出ぬ是ハ神田上水の源なれバ
水草生茂りいとしく物さびたる古池にて然とも覚え
ぬ状なるハ片端の呼なればなるべし辨才天の祠あり
村の名ハ是にとりてハ如何ばかり性なバ彼立石の處に
来ぬ此をも又車にて走りつゝ淀橋の際に憩ふ池水の
過る呼なり小金井を出し頃迄ハ靜なりしと漸次風吹

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24
ガラス使用

出て終ハ面と向くべうらめ程り為(ナ)ればぞうて美(クハ)し
うそしもかくてハ散ぬらむ好き隙のこゝ見えつゝと
思ふタつ方なし家ゝハ帰仁ゝらば昔ハ駒ならばこそあま
歩(スヽ)みてハ健(スヽム)なゝ人ならでハ一日ゝハ往脳(ユキ)めゝをゝて
暇無けハ黙し暇有ゝハ先府中の駅(ウマヤ)ゝゆ紀宿で明日(アスヽ)な
し見て帰ゝと斯容易(カヽタヤス)く往来(ユキカヒ)事(コト)なれゝ是(コヽ)もめでた
た御代の大御恵(オホミメグミ)の一つなゝお人言ゝ驚ろかされて年来の
願いを果(ハタ)せゝハに小懸(ヲカ)し花の使ふとや育なし心(ウラ)も慰(ナグサ)
しくこそ、明治九年四月十七日燈(トモシビ)の下(モト)にて誌す

鈴木重家書翰記

都(スベ)て古た物ハ何ゝ〳〵ゆうしたと筆の跡などハ殊ゝ其
人柄の想像(オモヒヤ)らゝ〳〵事ゝてわたて見ま欲きゝのなゝと
ゝゞ叔母君ハ紀の殿ゝ仕へ給いなゝと慶應の初殿ゝ
従ひて和歌山ゝ往た一年ばゝゝて帰ゝ給いし翌年
の夏志ゞしの暇賜ハゝて来ま志ゝ時彼地ゝと賚(モタラ)し給
へゝ物何くれと賜いし中ゝ是(コヽ)ハ彼國ゝ鈴木某とて源
義経(ヨシツネ)ゝ仕へゝし三郎重家の裔(スエ)ありと家ゝ傳へたゝ其祖(オヤ)の
書翰と龜井六郎武藏坊辨慶ゞ書と三葉(ヒラ)石摺(ズリ)ゝして出

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24
ガラス使用

すと求め得しなどして賜ふいと情しくて打も置ず展
披観るに文治五年二月重家東より下れし時故郷紀國藤
白なる子息より贈るる状なり其文中に據るに義經の跡と
暮し親族かも告ず家出たて出羽國より下るとて義經及
因縁ある龜井六郎陸奥なる秀衡の許へ忠なくて在由
を聞悦びて其由告遣りぞ有らん文中たうだち殿と有
ハ秀衡君と云ふハ義經なり六郎のハ同年の二月重家
小贈れる書辨慶のハ熊井太郎より奥へし九戸戦功の感
状なり共に希見しなるバ一つ見うつ當時の事ども語
らひ暮たつ其後もをり〳〵取出て友さへ示し昔へ偲ぶ
くはバしとなりて藏め持るとし成太平の秋鈴木翠園
翁主が萩園を訪ひし時例の實や昔今の物語せら
まし因に我同家より鈴木三五郎と云ふあり是か徳川家
将軍の頃久能御門番なりし榊原越中守の與力にて此
家より其祖重家の書状あり杉原やうの紙にて云々の文
なりとふみ語り出らまし故そをかりて彼紀人の事ど
の語と其模本を取出て見せしか翁熟覧ありて我一年
駿河かまりてなる時祖先の真蹟なれが少も違へじと

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24
ガラス使用

慇懃(ネムゴロ)に摸(ウツ)し置るが有(ソレ)甚(イヤ)く異(コト)なりと云ふるい小驚られて
原色(ソノサマ)を失ひじとあそれのすき習ひなるといふなる事な
らむと不審(イブカシ)く彼摸のゆうしなれば昨翁許訪(キノフガリトブ)らひて摸
とそし揭本と俚見(アヒミ)なるか實(ゲ)と文字違ひ仏ど書風も
異(カハ)て行(クダ)と長短あて齊(ヒトシ)うら更(モシ)字の置處と形の違へる
もあり花押も大抵(オホカタ)ハ同なれど點畫の誤はへあれが興
ひめて其違ひめと見るばれ為假(ナリ)。其狀(サマ)を摸し置ぬ但
し原書ハ虫喰(バミ)ひて讀難き處々あるを揭本ハ完(ヲタ)全ひ
比校(クラベミ)て補ふこと無りも非更ひて是(コヽ)を由(ヨリ)て思へバ紀人
の持るハ古く寫せる物なるを甚まく揭本と爲(ナセ)し
らハさ手能く書く人ひ誂(アツラ)へて文のまゝひ書ゑめたら
なるばしほをバ是ハ文章の寫さハ云ばく真蹟の摸(ウツシ)へ
ハえばらばるなり又之を准(ナゾラ)ふるバ此餘(ホカ)の二葉もお
ぶつかくこそ元古人の真葉(マヒ)ひて世り傳ふる手鑑墨
帖の類これも有なれど真のハ稀(マレ)らひて後人の造れ
るが多かるとと聞及べそ其(ソノ)中ハ元世人の摸し置るを真蹟な
り造れるも有ばく又何とれく人の摸し置るを真蹟な

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24

ガラス使用

とこ云傳へしも有ゆべなれが能々其出處来歴を糺し
返すべ〳〵鑒定をも歴ばまが容易く信ひ難たきのな
きを此一事ぎても思ひ合せられ知らばる人い惑ふべ
けまが其が為ぎもせま欲く已重家ぎハ由縁無れど七
百年ぎ近ク筆の跡の今の現ぎ存ぎるを見て其人柄を
も當時の狀をも窺ひ知ぎ真蹟の在所はへ明らめ得つ
ぎハ叔母君ど翁の賜なるが悦ばしく少其由を記し置
ぎなも明治十二年十月十八日

於烏辨

古ヘ於ハれ烏ハをり借用みてすこしも混雑せらこゝなし然るに於ハ説文ゝ給象古文烏省の省ゝと同字なりと此ゝ別ちたるハ如何ニ云ふに先於字ハ廣韻の近平聲第九魚韻ゝ於居也代也語辞也云ゝ央居切又音烏ゝ有て韻鏡第十一轉喉音平聲清行第三等小収七烏字ハ廣韻の上平聲第十一模韻ゝ烏安也語辞也説文ゝ日孝烏也云ゝ哀都切又字彙ゝ何也與悪同又歎辞與嗚同なゝ有て韻鏡第十二轉喉音平聲清行

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24

ガラス使用

第一等ニ収めたレ是於烏ト同字なるといへど自ニ
體となりて音と義も異(カハ)レ開合の差別(ケヂメ)も有(ル)ニ依テ此(コ)の
如し然(シ)かるに古漢人の口ニ呼(ヨビ)ちを打聞(キ)ニ於ハをゝ遠(ヽ)
ふてゐ(ヰ)ゝ近く烏ハゐ(ヰ)ゝ遠くしてをゝ近(チカ)きを以(モ)てゐ(ヰ)を
ゝ分ちて借用(カリモチヰ)たるならめはて於字ゝ又二音二義ま
了廣韻烏字の屬(ツヾ)ゝ再此字を出(イ)して於(ヲ)ニ古作ニ於戲ニ今作ニ嗚呼ニと有て
魚韻の於ゝ又音烏ニ有るの即是なり依て又ゐ(ヰ)の假字
ゝ用(ツカ)ふハ魚韻の央居切の方ゐ(ヰ)て此事既(ハヤ)く字音假字用
格ゝ或曰於字字書ヲ考ルニ烏ト同音ナリ然ルニ烏ハ

とノ假字於ハおノ假字ニ用ルコトイカヾ是ヲ以テ見
レバ畢竟おを等ノ假字ヅカヒ實ハ差別ナキコト依答
云玉篇ニ於央閊反居也又倚辛反歎辭トアリ烏ト同音
ナルハ此倚辛反歎辭ノ方アヽトヨロコブ是ナリ讀ムト
ルハ央閊(イヤウリヨ)反(アウ)ノ方ニテ漢音い呉音お
明なり又韻鏡第十一轉の開合異同あてて文雄の磨光
韻鏡ゝハ合ラして一本閊ゐ作ゐを非なりと云ひ字音
假字用格とゐ同くて於ハ開合ゐ渉ゐ音なりと十開合
指掌圖と作て其説明あり是いゐ(ヰ)ゐ(ヰ)ゐ(ヰ)ゐ(ヰ)開合ゐて分れたるゝれ

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24
ガラス使用

をのこ獨其格を違ふなきにあらず然るに今齋の漢呉音圖説にて此事を論じ連富本にて此二字を同て開と定むれどもたをの假字も亦いろ〳〵開合ありて分るゝ所あるを是ハ予が若年より物學せむとて岡本況齋翁詳生つゐ次の日試みに問於和學者何故に假字違ひとてもかくの如く云ひ騒ぐや此二字の分別明白に答ふる和學者世上に有りや無しや此二字の答出来ざれバ夫にて立ぬる歌を詠め書る處假字違ひも有まじ若此答胡乱ならバ退たて小學をなして学悟すべしと云おこせらるゝに依りて苟且に記し又の日持往てかゝる故をハ亦更に聞て真の此説の如く開合にて分るゝ悦ぶこれたしく悦ぶこれた

拜伊奈波神詞

掛巻母長伎伊奈波大神能大前尓謹美敬比恐美恐美白佐久行道甚母愚劣伎身尓有衰何奈留事尓有弖不意久大神能御前可齋奉伎仕被利負氣無久堪難伎事波恐畏美恐毛能良辞奉良牟母亦甚畏尓礼仕能隨仕奉波牟登為礼素興足波須性尓有婆過犯須事能可多有伎衰其波大神能廣伎厚伎御心尓見直之聞直之坐弖神事緩美怠留事無久常尓美久仕奉之給比大神能領給地波更奈利天下四方國尓暴風

洪水大雨地震火災疫病其他諸能枉事不令有五穀豊饒
給閇登鹿自物脇折伏せ鶏自物頸根突抜氐畏美畏妣
奉良久白

祈天照大御神詞

掛巻母畏伎天照坐皇大神能大前尓謹美敬比畏美畏妣
白久天地能初發能時與利生登生成登成坐留神等甚多有
尓火神波母殊尓奇靈尓貴久坐麻之氐高天原袁所知食千萬
年一日母落事無久朝日能豊榮登尓天下隈無久照志給
北皇御孫命此豊葦原能瑞穂國尓天降坐氐天津日嗣絶
留事無天地能共無窮尓治給比八神亦神風伊勢國拆
鈴五十鈴原尓下津磐根尓宮柱太知立高天原尓千木高
知氐鎮坐留依氐谷蟆能狭度極潮沫能止限山國土尓生
出留蒼生波申母更奈利生蕃息礼留草木鳥獣魚虫能類尓至
麻氐何加其恩頼袁不被者可有伎駄尓此百詩年美濃國厚
見郡小熊村奈留公民伊別氐深久其御恵袁忘此度

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24
ガラス使用

奥山能大峡小峡尓生立留木素本末打伐氐持参来氐大神能瑞能御殿奉仕氐大御魂素齋鎮奉利遠久長久御代乎白之彌益益尓御恵素母被賜青海原能物波鰭能廣物鰭能狭物奥津藻菜邊津藻菜山野能物波甘菜辛菜尓至麻氐御酒波厩上高知厩腹満雙氐和稲荒稲尓至麻氐如横山打積置氐献留宇豆能大幣帛素安幣帛能足幣帛登平久狭久安久狭尓聞食氐其清久赤伎真心素神随賞給比愛備給比永久尓鎮坐志夜能守日能守尓幸賜給比諸能杜事不令有立穀素初萬能物豊饒尓富足比子孫能八十連属尓平久安久

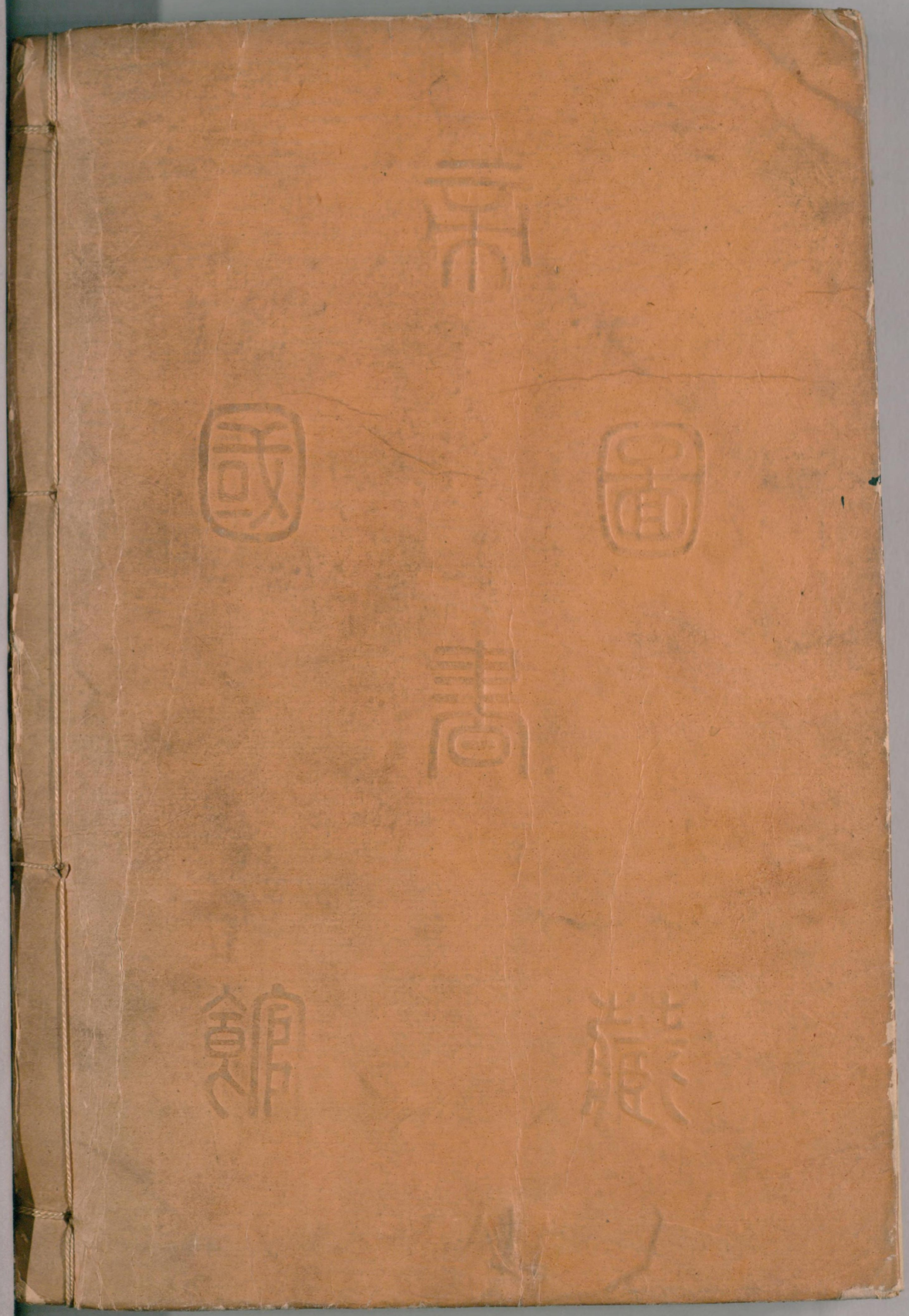
乃美之久栄之米給閇登畏美白

此二詞ハ明治六年の冬予伊奈波社の祠官ゐ任りをり
さて初て大神を拝み奉らほどせし時のぞ其頃同縣下なる小熊村ゐ新宮を營造て天照大御神を齋祀ぐべく設置しより依り試ゐ艸ゐ草ゐつゞなるを俄ゐ縣廳より出仕せゐとより果ゐで止めずず甚遥ながら乗とやらず記し置なり

836
3
24

国立国会図書館　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『荻屋集』　請求記号 836-24

ガラス使用